君がため惜しからざりし命さへ【完結】

トマトルテ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あなたには今日から７日間、私のお婿さんになってもらうわ」

「かしこまりました！　……は？」

突拍子もない思い付きだけの言葉

それは作られた男が女から与えられた生きる意味。

人でも妖でもない男と死を誘う姫君が共に過ごした短き日々。

これはそんな２人の７日間の結婚生活を記録した物語。

※西行法師に作られた人造人間オリ主が生前の幽々子のお婿さんになる話です。

旧タイトルは『西行の人造人間、婿になる《完結》』となります。

目次

〜本編〜

一話：開花 ―― 1

二話：三分咲き ―― 18

三話：五分咲き ―― 36

最終話：満開 ―― 65

〜おまけ〜

五話：幻想郷 ―― 84

六話：親愛なる庭師 ―― 93

七話：亡霊夫婦 ―― 105

八話：馴れ初め ―― 115

～本編～

一話：開花

人でもなく、妖でもないのならば、一体この身は何者なのだろうか？

自分が意思を得てから、否、生まれた時から抱き続ける疑問を夜空の月にぶつけてみる。

しかし、当然のことながら月は答えてはくれない。

旅の間に幾度か行ってきた行為だが、感じる虚しさは目的が近いせいか今日はひとしおだ。

歌聖（かせい）と謳われる自分の生みの親ならば、この虚しさすらも歌に変えるだろう。

だが、失敗作の烙印を押されたこの身ではそれもできないだろう。

「歌聖、西行殿……あなたは何を思ってこの身を作られたのか」

一歩、また一歩と、己すら溶けていく様に感じる闇の中で長い階段を昇りながら思い出す。

自らが生み出された日を。人でも妖（あやかし）でもないこの身を生み出した者を。

それがしが生み出された日は、今日のような月夜だったと記憶している。
死人の人骨を集め、それに〝鬼〟が使うという人間を生む呪術をかけることで生みだされた。
作り出された故か主は西行法師であると理解できたが、その時の自分には返すべき名も無ければ、返すべき言葉も無かった。如何なる不具合か、生まれたばかりの自分には魂が入っておらず、心が無かった。それ故に、出来たことと言えば壊れた笛のように口から音を出すだけ。とても人間とは、否、妖と呼べる存在ですらなかったのだろう。

――――人にて人(人)ならず(不)、鬼にて鬼(鬼)ならず(不)。

故に西行殿は人とも鬼ともつかない得体のしれぬ者、つまり〝どちらでもない者〟という自分の本質を表す言葉を告げ、それがしを高野山の奥へ捨て去っていった。
捨てられたことも、何者でもなくなったことにも恨みはない。
あるのは、作り出されたにも関わらず主の期待に沿えなかった己の不甲斐なさを恥じる心だけ。
とは言っても、そうした感情も捨てられた直後に抱くことはなかった。

魂無き者に心は宿らない。
その言葉通りにこの身は捨て置かれてもなお、何も感じることなくただそこに在った。
その日々が終わったのは、自ら(人形)に心が宿ったのは今から数年前のことだ。

「止まれ」

物思いに浸っていたところを、冷や水を浴びせられるような声で呼び覚まされる。
顔を上げて階段の先を見ると、そこには巨大な門とその前に立つ1人の男が居た。
月光を浴び輝く白髪。鋭い眼光と抜身の刃のような佇まい。腰には2本の刀。
「人間…いや妖怪か？　まあよい、全ては斬ればわかる。斬られたくなければ用件を言え」
ただ者ではないと一目でわかる。下手な真似をすればタダでは済まないだろう。
故に怪しいものではないと告げるために両手を挙げる。
「夜分遅くに申し訳ない。それがしは不人(フヒト)と申す。高野山に西行殿が暮らしていたおりに世話になった者。西行殿にどうしても尋ねたいことがあり訪れた。都合が合わないようであれば別の日に出直すので、どうか西行殿に伝えて頂きたい」

男、おそらくは西行殿の屋敷の門番に自らつけた名前と用件を告げる。
それがしが旅を続けてきた理由。それは自らの生みの親である西行殿に会うことだ。
そして何よりも、今度こそ不出来な自身が与えられるはずだった役目を承るためである。
生み出された役目をこなすことが出来れば、この身は何者かになれるはずだ。
人としての役目をこなすことが出来れば、人間に。仮に化け物として扱われたとしても、妖に。
そうすることでこの身は初めて何者かを知ることが出来る。
自分が何者かを知りたい。たった1つ、その願いのために今まで旅をして来たのである。
「……それはできぬ」
「なぜだ？　それがしが何かそなたに不快な思いをさせたというのであれば謝るが」
「そうではない。できないのだ」
だというのに、男は首を横に振る。厳つい顔の下に悲しさを覗かせながら。
嫌な予感がした。いや、確信と言ってもいいかもしれない。
この身を何者かに定めることが出来る唯一の人間は。
「先代はもうこの世にはおられん」

もう、どこにもいないのだ。
「それは……」
「もう数年前の話だ。こちらを謀(たばか)っているかとも思ったが、その顔を見るに本当に知らなかったようだな。まあ、高野山から来たとなれば俗世の話が伝わっていないのも無理はないだろう」
いつの間にか自分の目の前にまで来ていた男が話しているが、内容は頭に入ってこない。
西行殿の死。それは自分が役目を与えられる機会が永遠に失われたということだ。
そして、作り出されたというのに、結局何の役に立つこともできなかったということでもある。
「大丈夫か、貴殿？」
「あ、ああ、かたじけない」
お前には生まれた意味などなかったと突き付けられたような錯覚に陥り、思わずふらついてしまう。それを男に心配する声をかけられたことでようやく意識が現実に戻ってくる。このままではいけないと漠然と思い、頭を振って思考を立て直す。そして、絶望から少しでも逃避するようにこれからのことを考える。
「……せめて線香をあげさせてもらえないだろうか？」

自分が何者かを知る術はなくなった。
だからと言って死ぬことは出来ない。これからも生きていたいと我が魂が叫んでいるのだから。
この身が何者であるか分からずとも生き続けなければならない。
そのためにも、まずは生みの親を弔うべきだと逃げ道を決める。
「できん」
だというのに、男から帰ってきたのは相も変らぬ否定だった。
しかも、先程よりも強い口調で鬼気迫るものすら感じさせる。
「……何も今すぐというわけではないのだが」
「そういう問題ではない。何人たりとも屋敷にあげるわけにはいかんのだ。特に西行妖を…あの桜を見せることはできん」
「桜？」
男の不可解な言葉に思わず首を傾げてしまう。屋敷にあげることが出来ないのは、何かしら理由があるからだろうと判断できる。しかし、桜とはどういうことだ。桜を見ることが、何故屋敷に上げることの拒否に繋がるのか。
「知りたいかしら？」

天から降り注いできた背筋が冷たくなる程の色気を纏う声に総毛立つ。
恐る恐る見上げると、そこには月を背にして笑みを浮かべる少女が浮かんでいた。
金色の髪に、この世のものとは思えぬ美貌。だが、第一に感じるのは美しさではなく胡散臭さ。
「実際に見てみるといいわ。人間と妖の境界に立つお人」
「…！　そなたはそれがしのことが――」
少女の言葉に驚き、自分の正体が分かるのかと問いかけようと足を踏み出す。
それと同時に沸き起こる唐突な浮遊感。思わず少女から目を離し足元を見る。
そこにはあったはずの地面が見当たらず、不気味な目が無数にうごめく隙間（スキマ）があった。
驚きの声を上げる間もなく、体はその隙間の中に落下していく。
「女狐！　貴様はあの者を死なすつもりか!?」
「あら、人聞きの悪い。それと私の名前は紫（ゆかり）よ。女狐じゃないわ。まだ覚えてくださらないのかしら、妖忌（ようき）さん？」
「お嬢様をたぶらかす者など女狐で十分だ」
「たぶらかすなんて酷いわね。友達よ、友達」

落ちていく寸前にそんなやり取りが聞こえてきたが、それに対して深く考える余裕などない。必死に落下を止めようと腕を伸ばすが掴めるものもない。一体自分はどこまで落ちていくのだろうかと漠然とした不安を抱き始めた所で、足の先が硬い地面に当たる。

「ここは一体…？」

唐突な出来事の連続に、思わず転びそうになってしまうのを何とか踏ん張って止める。

混乱しながらも、ひとまずは状況を把握しようと辺りを見渡す。

そして見つけてしまう。巨大な――桜（死）を。

「これは桜…か？　開花したばかりのようだが……こんなにも禍々しいものが存在するのか」

一目見ただけで圧倒される黒々とした立派な幹。今日、開花を始めたばかりらしくポツポツと咲く花びら。もし、この桜が満開に咲き誇るというのなら、それは素晴らしい光景になるだろうと分かる。だからこそだろうか、この桜を見れば見る程にある感情に襲われる。

もしもこの花の下で死ねるのなら、それは何と素晴らしいことだろうかと。

死への誘い。甘美なそれは正常な思考を奪っていく。

このまま木の下へと向かい首をくくろうと、何の戸惑いも無く生まれる破壊願望。だが、己の本質とも言える能力がそれに待ったをかける。

――――死にたくない！

心の奥底から呼び覚まされた願望が叫びを上げ、この身に正気を取り戻させる。

「…ッ！　危なかった…あの紫という者はそれがしが死なぬと知って送ったのだろうか…？」

妖忌殿が桜を見ることに難色を示していた理由を理解すると同時に、紫殿に危ない綱渡りをさせられたことを理解し溜息を吐く。しかし、このまま立ち尽くしているわけにもいかない。話の流れから考えれば、この桜、西行妖は西行殿の屋敷の中にあるもの。

つまり、自分は今、西行殿の屋敷の中に許しなく侵入していることになる。不可抗力とはいえ、あまり感心される行為ではないだろう。そう考えて妖忌殿が居るであろう門まで戻るべく、静かに足を進めることにする。

「あら、あなたは死のうとはしないのね」

鈴を鳴らすような声が聞こえてくる。見つかってしまったと小さく溜息を吐き、足を止める。

そして見つかっては仕方がないと開き直り、声の方に目を向けると1人の少女が居た。

「好きで死にたい者などそう多くはおりますまい」

「それもそうね。でも、私が見てきた人間はみんなその木の下で死んでいったわ」

「そなたにはそれがしが人間に見えますかな?」

「あら、妖怪さんだったの?」

「さて、それが自分にもどちらなのかとんと分からぬのです」

「ふふふ、おかしな人」

儚く、それでいて優美な桜のような少女だった。

雪原のように白い肢体は触れれば折れると思う程に細く、色気と共にもの悲しさを醸し出す。

ふわりと舞う髪は花のように艶やかで、柔らかく宙を飛ぶような軽やかさを感じさせる。

しかし纏う空気はおよそ生気がなく、死そのものが人間を象(かたど)ったのではとすら思わせる。

「それで、あなたはどうやってここに来たのかしら？　門には妖忌が居たと思うのだけど」
「信じて頂けるか分からぬが、何やら足下に開いた隙間（スキマ）に呑まれていつのまにやらここに」
「信じるわ。だって、きっとそれは私の友達の仕業だもの」
そう言ってクスクスと花が咲いたように笑う少女の姿に、思わず死を忘れて見惚れてしまう。
しかし、少女が話を再開したことでそれも終わりを告げる。
「でも、紫が連れてきたのなら死なないって分かっていたからよね。妖怪じゃないなら何か特別な力でもあるのかしら？」
「特別かどうかも、力かも分かりませぬが心当たりが1つだけ」
「教えてくださるかしら」
この能力こそが、抜け殻の人形に魂を宿した原因。
否、人形に魂が入り込んだからこそできた能力か。
「――――生にしがみつく程度の能力」

それがこの身に宿った命が持つ能力だ。

西行殿に高野山の奥に捨てられてからしばらくは、自分は相も変らず心の無い人形だった。

何もなければ空っぽの器はそのまま土に還っていたことだろう。

しかし、空っぽ故に捨てられた器にも使い道があり、場所もそれがしに味方をした。

高野山は古くからの霊山であり、多くの者の魂が眠る墓地でもある。

成仏しきれずに幽霊や亡霊となる魂も数多くあった。

それらも何もなければ、いずれは冥府に招かれるだけの存在だっただろう。

だが、それがしという存在が不可解なことを引き起こした。

魂が無い故に生きることが出来ない肉体と、肉体が無い故に生きられぬ魂。

肉体が魂を求め、魂が肉体を求めて1つとなった。簡単に言ってしまえばそれだけだった。

しかし、如何に魂と言えど元は赤の他人の物であり、同時に既に終わった命である。単なる寄せ集めではバラバラで命を生み出すことはない。だというのに、それがしという1つの命を生み出したのはなぜか。それは、全ての魂が〝生きたい〟と願っていたか

らだろう。
成仏もせずに残っていた魂なのだ。細かな理由は違えど〝生きたい〟という願望に違いはない。
故に魂は〝生きたい〟というただ1つの願いを元に1つの命（それがし）を生み出すに至った。
醜くとも、みっともなくとも、がむしゃらに生きることを望んだ結果生まれた命。
それ自体がこの身の本質となり『生にしがみつく程度の能力』を為した。
こうした常人離れした生への執着故に、それがしの身は死への誘いに耐えることが出来るのだ。

「数多の生きたいという願いが死をも払いのける1つの命を生み出したのね。こういうのを奇跡と言うのかしら」
「亡者の呪いかもしれませんぞ？　呪いの人形とて同じような生まれでしょう」
「あら、その割にあなたは世を恨むような顔はしていないわよ？」
「……さて」
あの後、どういうわけか縁側にて月見に誘われたそれがしは、隣に座る少女、西行寺幽々子殿の指摘をごまかす様に茶をすする。そんな、それがしの姿を見て幽々子殿はおかしそうに笑うが、不思議とその顔を見ても苛立ちは感じず、むしろ安らぎを感じるの

だった。
「それにしても、お父様が人間を作る術を使えたなんて知らなかったわ」
「余り表沙汰にしてよい話ではないでしょう。何より、それがしは人間となることができなかった身。故に、わざわざご息女である幽々子殿にも伝えようと思わなかったのかと」
「それもそうね」
そう言って幽々子殿はそれがしの湯飲みに新しくお茶を入れてくださる。
それを恐縮しながら受け取ると、またおかしそうに笑われてしまう。
確かに傍から見ればおかしな行動に見えるかもしれないが、彼女は西行殿のご息女なのだ。
自身の創造主のご息女ともなれば、如何なる存在であろうと否応なしに硬くなってしてしまう。
「それで、不人（ふひと）さんはお父様を訪ねてきたのよね。もしかして捨てられた復讐のためにかしら？」
そんな緊張する自分のことなどお構いなしに、幽々子殿はポンポンと言葉を続けていく。
そして、復讐という言葉が出た際に心なしか傍に控える妖忌殿からの圧が強くなる。

復讐など欠片も考えていないので、圧をかけるのをやめて欲しいと思いながら慎重に口を開く。
「復讐などもっての他。それがしはただ、この身が何者かを知りたいだけです」
「自分が何者であるかを?」
「はい。恥ずべきことにこの身は生まれた時は失敗作でした。故に私は人にも妖にもなれなかった。しかし、命を得た今ならば与えられるはずだった役割を果たし、この身が真に何者かを知ることが出来ると考え、西行殿の下へ訪れました」
「でも、お父様は既に死んでいるから、自分の役割を知ることが出来ない。それが今の状態ね」
「はい……」
幽々子殿の言葉に力なく頷く。作られた役割を知ることができないからと言って死ぬわけではないが、生きる上での目的が無くなってしまったことに変わりはない。これからどうするべきか分からないのが現状だ。
「だったら、私が決めてもいいかしら?　あなたが作られた役目を」
「……はい?」
突拍子もない幽々子殿の言葉に思わず失礼な声が出てしまい、慌てて口を押さえる。
「親の物を子が受け継ぐのは自然なことよね。だったら私が責任を持ってあなたに役目

を与えるわ。これなら人間でも妖怪でもないあなたも、何者かを知れるんじゃないかしら？」
「は、はぁ…」
もっともらしい意見を言われて自分の中でも考えてみることにする。
幽々子殿の言葉は一応は筋が通っている。
それにこのままでは、一生作られた理由を知ることができないのは変えられない事実。
で、あるならば、ここで正統な後継者である幽々子殿にこの身を委ねるのが最も正しい道。
そう考えをまとめ、姿勢を正して幽々子殿に深々と頭を下げる。
「今日、この時より幽々子殿を主とさせて頂きます。何なりとお申し付けください」
「ふふ…そんなにかしこまらないでいいのに。でも、そうね。自分から言った以上はちゃんとしたものにしないと」
頭を下げているので見えないが、幽々子殿が何やら考えているのが伝わってくる。
それをジッと待ちながら、如何なる命であろうと受け入れる覚悟を固めていく。
身の回りの世話やもしれぬ。盗人に身をやつすやもしれぬ。戦に出るやもしれぬ。
しかし、何であろうとも『かしこまりました』と答えるだけ。難しいことは何もない。

「よし、決めたわ。よく聞いておいてね、不人（ふひと）さん」
「ハッ！」
そう覚悟を決めたところで、いよいよ幽々子殿が声をかけてくる。
何やら楽し気な空気が漂っているのは、余程良い案が浮かんだからであろう。
元は出来損ないのこの身で、それだけ喜んでいただけるのならば望外の喜びだ。
「いい、不人（ふひと）さん。あなたは今日を入れて7日間――」
幽々子殿がちらりと桜の方角を見て日数を決める。
まあ、続く言葉が何であろうと関係はない。すぐに返答が出来るように喉を鳴らす。

「――私のお婿さんになってもらうわ」
「かしこまりました！　……は？」
完璧な返答を終えてから初めて幽々子殿が何を言ったのかに気づく。
しかし、瞬時に自分の聞き間違えだったのだろうと判断し、妖忌殿の方を見る。
何故か妖忌殿も鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしておられた。
「それじゃあ、不束者ですがよろしくお願いしますね、旦那様？」
まるで悪戯に成功したような笑みで言われた言葉に、乾いた笑いを返すしかなかったのだった。

二話：三分咲き

二度寝をしてしまいたくなる春の陽気に誘われ、どこかから鳥のさえずりが聞こえる朝。

できることならば、自分もそののどかな声に身を委ねてまどろんで居たい。

だが、そういうわけにもいかないのがこの身が置かれた現状だ。

「旦那様、朝食の準備ができたので起きてくださいね」

「かたじけない。すぐに行きます故、しばしお待ちを」

ふすま越しに聞こえてきた幽々子殿の声に、昨日の出来事は夢ではなかったのだと改めて理解する。日が変わり2日目になった今でも幽々子殿が何を思って、自分を婿にすると言い出したのかは分からない。やはり一度詳しく尋ねておくべきだ。昨日はもう遅いという理由ではぐらかされたので朝食を取りながら聞いてみるとしよう。そう、考えをまとめながら身支度を整え、食卓へと向かう。

「おはようございます、幽々子殿」

「ふふ、昨日はよく眠れたかしら旦那様？」

「……そなたのことが頭から離れず眠れぬ夜を過ごしていました」

「あら、そこまで想って頂けるなんて嬉しいわ」
こちらの皮肉ともとれる冗談にも気にすることなく、微笑みを浮かべる幽々子殿。
しかし、その顔はすぐに苦しそうに歪み、コホコホと咳き込み始めてしまう。
「幽々子殿……！」
「……ごめんなさい。でも、もう大丈夫よ。今日はちょっと朝から張り切っちゃっただけだから」
そう言って並べられた料理を指差す幽々子殿。
見るだけで美味いとわかる料理達。しかし、それ以上に目を引くのは彼女の手だ。
細すぎる手にはあかぎれがあった。要するに自分のために手ずから作ってくれたのだ。
「……そうですか、それは楽しみです」
「ええ、だから冷めないうちに食べてくださいな」
これは心して食べなければ失礼にあたる。
そう考え、湧き上がってきた疑問を頭の隅へと追いやる。
これだけ広い屋敷だというのに、女中の1人も居ないのは何故かという疑問を。
「いただきます」
「どうぞ、召し上がれ」

聞きたいこともあるが、今は目の前の料理に集中して箸を進めていく。
幽々子殿の料理はどれも美味しく、それでいて確かな素養を感じさせた。
恐らくは花嫁修業としてしっかりと母親から仕込まれていたのだろう。
「これは大変美味です」
「気に入って頂けて何よりだわ」
だからこそ分かってしまう。
初めての料理でもないのに、簡単にあかぎれが出来てしまう幽々子殿の体の弱さが。
「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末様でした」
食事をしっかりと味わい尽くし、幽々子殿に向き直る。
何故、婿になれなどという命を与えたのかの真意を問いたださなければならない。
「あら、そんなに見つめられると照れちゃうわ」
「幽々子殿……」
「ふふふ、そんな顔しないで。あなたが聞きたいことは分かってるから。でも、そうね……それを答える前に私の話をさせてもらるかしら？」
「勿論です、幽々子殿」
こちらの了承を得ると、幽々子殿はどこか遠く見つめるように語り始める。

「ねえ…あなたは私を見て何を感じるかしら？」
「……死にたくない、生きていたいと。あの桜を見るのと同じく、死を感じます」
「そう。私はあの桜と同じで『死に誘う程度の能力』を持っているの」
　見た目はどこまでも儚く美しい姫君。だというのに、彼女は何よりも恐ろしい。生きとし生きる者にとって彼女は天敵だ。常軌を逸した〝生きたい〟という願望を持つ自分か強い人外でなければ、彼女の前で自ら命を絶ってしまうだろう。それが彼女に近しい者であれば尚更に。
「ここもね…本当はもっとたくさんの人が居たの。私の力も最初の頃は強くなかったから。でも、あることを境にどんどん力が強くなって、みんな死んでいったの」
「……あることとは？」
【願はくは　花の下にて　春死なむ　そのきさらぎの　望月のころ】
　幽々子殿は桜がある方角を見つめながら1つの歌を詠む。
　叶うことならば、桜が咲き誇る春の満月の日に死にたいという歌を。
「……この歌の願い通りにその人は桜の下で死んだわ。そして、それに感銘を受けた多くの人々がその後に続いた。ただの桜が人の血を啜る妖怪に変わるほどに」
「そして、幽々子殿は桜の影響を受けて同じ力を持つに至ったと……」
「ええ……こんなことなら私もみんなと同じように死に誘われた方が良かったかもしれ

ないわね」

自らの罪深さを嘆く様に憂いのある息を吐く幽々子殿。

未だに彼女の姿を見るだけで死の恐怖を感じるのに変わりはない。

しかし、自分は憂いに沈むその姿を見て何も思わぬ程の非道ではない。

「少なくとも、それがしはそうは思いませぬ」

「あら、どうしてそう思うの？」

「それがしが幽々子殿に会えてよかったと心の底から思っているからです」

そう言うと、驚いたように瞳をパチクリとさせる幽々子殿。

「仮にそなたが死んでいればそれがし達は出会うことは出来なかったでしょう。しかし、出会うことが出来た。それは幽々子殿が今まで生きていたからこそ。ですので、声を大にして言いましょう――――あなたが生きていてくれてよかった、と」

反論を挟ませぬように一気に言い切り、もう一度幽々子殿の顔を見ると呆気にとられたような顔をしていたが、すぐにそれも終わり、実に愉快そうなものになる。

「ふふふ…そんなことを言われたのは初めてだわ」

「恐縮です」

「でも、どうしてよかったと思っているの？」

「それがしに役割を与え、自らが何者かを知る機会を作っていただけたからです」

素直に返事をすると何故か渋面を作られる。
はて、何かマズいことを言ってしまったのだろうかと考えていると額を指で突かれてしまう。
「もう、乙女心が分かってないわね。こういう時はあなたに恋をしたからとでも言わないと」
「は、はぁ…申し訳ございません」
「鈍感な旦那様ね、でも許してあげる。生きていてくれてよかったって言われて嬉しかったから」
そう言って幽々子殿は相も変らぬ生気の無い顔で片目をつぶってみせる。そんな茶目っ気のある姿に呆れるべきか、見惚れるべきか判断がつかず話題を変えることにする。
「それで…その…それがしを何故婿とするなどと言い出したのでしょうか？」
「ああ、そう言えばそんなお話をしていたわね」
思い出したとばかりにポンと手を叩く幽々子殿。
その態度に思わずジト目を向けてしまうが、ひょうひょうとした様子で躱されてしまう。

「私ね、お嫁さんになりたかったの」

簡潔な答え。あまりにも簡素な言葉のために続く言葉を待ってみるが続くものはない。

本当にそれだけなのかと目で問うてみるも、そっけなく頷かれてしまい戸惑ってしまう。

この身は人間でも妖怪でもないが、婚姻の重さぐらいは理解している。

故にこんなに適当に婿を決めて良いものなのかと思ってしまうのだ。

「本当にそれだけの理由なのでしょうか?」

「嘘じゃないわ。幼い子供の時に抱いた夢。それを叶えたかっただけだもの」

「しかし、幽々子殿ならばそれがしなどではなく、もっと――」

そこまで言って自らの失言に気づき口を閉じる。

しかし、幽々子殿はそれを気にすることなくあっさりと告げる。

「そう、私の傍に居る人はみんな死んでしまうもの」

屋敷に居るはずの従者すら今は妖忌殿しかいない。

そうだ。幽々子殿の傍に居ることが出来るのは死から逃れる術を持つ者だけ。

普通の人間では立ちどころに桜の養分となるだけだ。

「……他に候補はおられなかったのですか？」
「そうねぇ、紫は同性だし、妖忌は家族でそういう目では見れないから、あなたが初めてよ」
「左様ですか…」
　だからこそ、それがしを選んだのだろう。様々な意味で丁度良かったのだ。自分の傍に居ても死ぬことが無く、それでいていきなり婿としても何も問題が起きない身分の存在。この身は既に幽々子殿を主として定めているので、ボロ雑巾のように扱われても何も文句はないが、それでもなお少し呆れてしまう行動だ。
「そんなに呆れた目で見ないで。これでもあなたのことは気に入っているのよ？」
「では、さらにご期待に沿えるように努力しましょうか」
「あら？　意外と乗り気ね、それなら――ケホ…ケホ！」
　機嫌が良さそうに笑っていた所から一転し、苦しそうな顔で咳き込み始める幽々子殿。
　明らかに先程よりも酷い咳き込みようだ。
　それがしは慌てて立ち上がり幽々子殿の背を擦りに行く。
「ご、ごめんなさいね。もう少ししたら収まるはずだから…コホッ」
「……少し休みましょう。今日は朝早くからそれがしのために無理をさせて申し訳あり

ません」
「でも…お皿の片づけもできていないわ。お嫁さんなんだからそれぐらいしないと」
駄々をこねる子どもの様に引こうとしない幽々子殿。
その姿に少しの違和感を感じるが、それを頭の隅に追いやり彼女の体を抱きとめる。
同時に〝死に誘う程度の能力〟が強まり、それがしの〝生にしがみつく程度の能力〟が『逃げろ！』と悲鳴を上げ始めるが彼女を決して離すつもりはない。
「あ……」
「幽々子殿……あまり夫を心配させないでください。夫が望むのは妻の平穏。倒れられては元も子もありません。夫にとって最も大切なのはご自身の身だということをお忘れなきよう」
ほんの少し力を込めれば折れてしまうのではないかと思う肢体を、慎重に抱きしめる。苦しくはないだろうか、痛くはないだろうか。夫とは本当にこのようなことをする者なのだろうかと。そんな不安が湧き上がってくるが抱きしめ続ける。
「……そうね、ちょっと舞い上がってたわ。少し休んでからにしようかしら」
「はい、それがいいでしょう」
何とか納得してもらえたようなので、ホッと胸を撫で下ろし幽々子殿を寝室へと連れて行く。

その途中で幽々子殿が恥ずかしそうに何事かを告げてくる。
「ねえ、お願いがあるのだけど」
「何なりとお申し付けください」
「1人で居るのは少し寂しいから、その……傍に居てくれる？」
「もちろんです」
断る理由がないので力強く返事をすると、花が咲いたような笑顔を見せてくれる幽々子殿。
その美しさに呆けてしまいそうになるが、頭を振りすぐに気を取り直して前を向く。
「ふふふ、それじゃあ今度はあなたのお話を聞かせてもらおうかしら」
「話…と言いましても、私に出来るのは旅の話と路銀を稼いだ仕事の話ぐらいですが」
「どんな話も語り手次第よ、楽しみにしてるわ」
「善処いたします」
その後は結局、幽々子殿が疲れて眠るまで2人で話をすることになったのだった。

西行殿の屋敷を訪れた日から3日目、庭の桜が三分咲きとなった頃。
それがしは屋敷から出て食材の買い出しに出ていた。本来ならば買いに出るまでは

まだ日数があったのだが、それがしという客人と呼ぶべきか家族と呼ぶべきか分からぬ人間が増え、急遽買い足す必要が出てきたのだ。

いつもであれば妖忌殿が買いに出るらしいが、今回は迷惑をかけた詫びも込めてそれがしが行くことにした。何もせずに居るというのも落ち着かないので丁度いい暇つぶしになったと言えばそうなのだが、初めての道に戸惑い昼過ぎに出たというのに帰りの今となっては既に日が傾き始めてしまっている。

急がなければ迷惑をかけてしまうと思い、米を持つ手に力を込め、足を早める。

「へぇ、どっちつかずのまま生きている奴も居るんだ」

しかし、風に乗る様に聞こえてきた声に足を止めてしまう。

どっちつかずというのは自分のことに違いないと思ってしまったが故に。

「何者か?」

声を出して声の主を探してみるが、四方を見回しても見つけることが出来ない。はて、空耳だったのだろうかと思い始めてきたところで、目の前に塵のような粒のようなものが集まり始める。驚いてそのまま見つめていると、それはやがて童女の形を取り同時に酒臭い匂いを漂わせ始めた。

明るい髪に、綺麗な瞳と小柄な体躯。だが、そこから感じるのは力強さ。

強い酒が入っていると思われる瓢箪(ひょうたん)をあおり、美味そうに呑んでいる少女。

それだけでも強烈な印象を与えるが、何よりも目を引くのは頭に生えた2本の角。
「何者かだって？　なもん――――鬼に決まってるだろ」
そう、鬼だ。力の象徴、災いの象徴であり、なおかつ、この身を生みだした呪術を扱う者だ。
思わぬ出会いに思わず顔が綻んでしまうのも仕方がないことだろう。
「……」
「…？　そなた何故それがしの顔を見て呆れた顔をしておるのだ？」
「そりゃあ、こっちの言葉だよ。鬼と名乗っても無反応な奴は見てきたことがあるけど、嬉しそうに笑う奴は初めてだ。あんた、頭おかしいんじゃないのか？」
出会い頭に頭の心配をされてしまうのは流石に傷つく。
なので、誤解を解くために自分の身の上の話をすることにする。
「それがしは不人（ふひと）と申す。既にお気づきやも知れぬが、鬼の呪術によって作られた者だ。それ故に鬼に会ったのならば尋ねたいことがあったのだ。なので、つい喜びが零れてしまったのだろう」
「呪術……ああ、あれか。ん？　でも、あれは人間を作れるもので、どっちつかずにはならなかったような」
それがしの説明に納得しかける鬼だったが、新たな疑問が浮かんだのか小首を傾げて

いる。
「何が起きたか分からぬが当初は失敗し、魂が入っていなかったのだ。それゆえに人でも妖でもない存在になり果てた」
「ふーん、そんなこともあるんだ。で、あんたは何が聞きたいの、失敗した理由？」
「いや、鬼は何のために人間を作るのかを聞きたい」
自らが作り出された理由を知りたい。その願いは片時たりとも消えることはない。
それがしを作った張本人である西行殿は既にこの世におらぬが、同じように人間を作り出す術を使う存在は目の前に居る。ならば、目の前の鬼に人を作る理由を問おう。そうすれば、この身が与えられるはずだった役割が分かるかもしれない。そう期待を込めて鬼を見やるが。
「分かるわけないだろ、そんなこと」
鬼はどうでもいいとばかりに酒をあおるだけである。
「分からない…？　自分で作るというのにか？」
「んー、なんか勘違いしているみたいだから言うけどさ。人間なんて特定の在り方があるわけじゃないんだよ？」
従者にするつもりだの、話し相手にするためだのといった理由であっても参考にするので、少しでも人間を作る理由が知りたいと思っていた心を見透かすように鬼が目を向

けてくる。

「あんたが手に持っている米と同じようなもんだ。

作り手が米を作っているのは誰が見たってわかる。

でもだ。その米が何に使われるなんて作り手にしか分からない。

いや、作り手も分かんないかもしれない。

育てた米を売る。食べる。家畜の餌にする。もしかしたら何かに奉げるのかも。

ただ食べるにしたって、そのまま食べることもあれば、粥にしたり、酒にすることもある。

人間だってそうさ。

用途が広すぎて同じ人間（もの）を作っている奴にすら、他の奴が何作ってるかなんか分かんない」

鬼の言葉に何一つ反論することが出来ずにただ黙って頷くことしかできなかった。

結局の所、いかにもな理由があったとしても、それが事実かどうかは分からないのだ。

暇つぶしのために作ったのかもしれない。もしかすれば、幽々子殿に与えられた役割が正解やもしれない。

そう。鬼の言う通りに作った張本人以外に理由は分かるはずがないのだ。

人間という多種多様な在り方を取る存在であればあるほどに。

「……目から鱗が取れたようだ。ご教授感謝する」
「いいよ、別に。それよりあんたは何でそんな面倒なことを考えているのさ？　こうして生きているなら役割ぐらい与えられて……ああ、失敗したんだっけ」
「ああ、だからこそ、自分が何者かを知りたいのだ」
「何でそう願う？」
「作り主に人でも妖でもない者と、そなたの言葉で言うなら〝どっちつかず〟と言われたからだ」
　質問に答えてやった対価だとばかりに尋ねられたので素直に答える。
「……ク、ハハ…ハハハハハッ！」
　すると何がおかしいのか、鬼は目をパチクリとさせたかと思うと、唐突にゲラゲラと笑いだす。
　何かおかしいことを言ってしまっただろうかと首を捻るが、やはり心当たりはない。
「ハハハ…なるほどね、それで〝どっちつかず〟なのか」
「何がおかしいのだ？」
　そして、ひとしきり笑い終えた後は1人納得したように頷く鬼。
　突然笑われて喜ぶ趣味は持っていないので、若干不機嫌になりながら問いかけてみる。

「んにゃ、なんでもないよ」
「なんでもないことはないと思うのだが……」
「まあ、細かいことは気にするなって。ただ、そうだねぇ…人間と妖怪の違いを教えてやるよ」
　何を思ってかは知らないがそんなことを語り、グイっと瓢箪をあおって酒を呑む鬼。
　その姿に自分が酒の肴になっているのだなと思いながらも、興味を引かれたので続きを待つ。
「妖怪ってのは人間の『こういうものだ』っていう願いっていうか印象みたいなもので在り方が決まる。鬼は強い、強い者は鬼だって思いから私達は生まれた。だから、生まれた時から強いし、弱くなりたいと願ったってまず弱くならない。仮に弱くなったらもうそれは鬼じゃない何かだ」
　また一口酒を呑み、口を潤す鬼。
「逆に人間は生まれた時はみんな弱い。でも、強くなりたいとも弱くありたいとも願ってそれを叶えることが出来る。誰かを妬んで、殺したい殺したいと願い続けた果てに鬼となった人間だっている。正直、自然に生まれた鬼なんかよりよっぽど恐ろしいものだよ」
　つまり、人間と妖怪の違いとはどういうことなのかと目を向けると鬼は分かっている

よと頷いて酒を呑む。……本当に分かっているのだろうか。
「妖怪は何者か最初から決まった存在で、人間は自分が何者かを決めることが出来る存在なのさ」
「仮に正体不明の妖怪がいる場合はどうなるのだ？」
「〝正体不明〟っていう正体があるじゃん」
面白そうに笑いながら答えられ、返答に困ってしまう。
屁理屈と言えば屁理屈だ。しかし、真実ではあるのだろう。
明確な姿を持たずとも妖怪であるのならば、最初から何者かが決まっている。
しかしそうなると、自分も正体の定まっていない〝どっちつかず〟という妖怪なのだろうか。
「いーや、今のあんたは人間にも妖怪にもなりきれていない存在だ。〝どっちつかず〟なのは変わらないけどな」
「……何故そう断言できるのだ？」
心を見透かされたような言葉に思わず肝が冷えてしまうが、努めて表に出さないようにしながら尋ねる。だが、返ってきたのは人を食ったような返事であった。
「さあ？　そいつは自分で考えなよ」
鬼の姿が空気に溶けるように薄くなり、風に乗って消え去っていく。

もう、会話をする気はないのだろうと溜息を吐き、それがしも背を向けて歩き出す。
「あ、そうそう忘れてた。私は伊吹萃香。ま、あんたがこっち側を選んだら歓迎してやるよ」
どこか楽し気な声が風に乗って聞こえてくる。
こちらには分からず、相手側だけが分かっている状態での会話。
本当に鬼と言うものは自分勝手な存在だと、陰鬱な気分になりながら家路へと就くのだった。

「おかえりなさいませ、旦那様。お夕食にしますか。それともお風呂にしますか？
ふふふ、一回言ってみたかったのよね、これ」

だが、そんな気分も嬉しそうに出迎えてくれた幽々子殿を見ると不思議と消えていくのだった。

三話：五分咲き

「ねえ、不人(ふひと)さんはどうして自分が誰かを知りたいの？」

屋敷に来て4日目、桜が五分咲きになった頃。

庭で妖忌殿が剣の鍛錬を行う姿を眺めていた幽々子殿がそんなことを尋ねてきた。

「何故、と言われましても自分が何者かが分からないからですが」

「そうじゃなくて、どうして分からないものを知りたいって思うのかということよ」

「知りたい理由…ですか」

妖忌殿の一種の芸術に見える刀捌きに見入りながらはたと考えてみる。

自分を知りたいと思い始めたのは生まれて間もなくだ。

その時になぜそう思い始めたのか……やはり自分が何者か分からなかったのが理由だろう。

「分からないのが嫌だったから…でしょうか」

「じゃあ、どうして分からないのが嫌だったの？」

「それは……」

何故こうも深く聞いてくるのかと思い、幽々子殿を見るが儚げな笑みを浮かべるばか

りである。単なる暇つぶしなのか、意味のある行為なのかは分からないが、主が求めるのならば全てに答えるだけだ。

「答えがない、分からないということは純粋に不快…いえ、不安だからです」

「不安？」

「はい。初めて挑戦する物事、何一つとして見えぬ闇、果ては未来。

結果がどうなるかが、目を凝らしても見えぬから、何が起きるか分からぬから。

人は不安を抱きます。分からないからこそ想像は無限に広がり心を蝕む。

霧に覆われる中で崖があると言われたようなもの。ただ一歩足を進めることにすら勇気がいる。

そのような不安を打ち消すために自らが何者かを知りたいのです」

普段は不安が表面へと出てくることはない。だが、鏡を見たときなどにふと思ってしまうのだ。

黒い髪も、黒い目も本当に自分のものか分からなくなる。そもそも自分は存在しているのか？

一度疑ってしまえば際限はない。答えを持たぬこの身は先の見えぬ闇に囚われてしまう。

それが不安で不安で仕方がないからこそ、分からないものを知りたいと願った。

人でも妖でもないと、生まれてすぐに言われたこの身を何者かにしたかった。

これこそがそれがしが自身を知りたいと願った根本的な理由なのだろう。

「分からない……そうね、分からないと嫌なことばかり考えちゃうわよね。私も誰かが死ぬのを見るより、誰かが死ぬかもしれないって考えている方が疲れるもの」

どこか現実離れしたような声を出しながら妖忌殿を見つめる幽々子殿。

聞けば妖忌殿は半人半霊という種族らしく、半分生きて、半分死んでいるらしい。

妖忌殿は人間ではないためか、それとも別の理由か分からないが死に誘われることはない。

しかし、それは今でこそ分かることだ。きっと能力が安定するまでの幽々子殿は不安だったのだろう。他の従者のように妖忌殿も死んでしまうのではないのだろうかと恐れたはずだ。次の日になれば死んでいるかもしれない。そう考えると夜も眠れなかっただろう。

それを思うと急に自身が下らない悩みで苦しんでいた卑小な存在に思えてくる。

彼女はその酷く脆い背中に一体どれだけの苦しみを背負ってきたのだろうか。

仮にも彼女の夫である自分は何か助けとなることが出来ているのだろうか。

「あら、どうしたの？　そんなに見つめてきて」

「……いえ、見惚れていました」

「ふふ、ありがとう。でも、もっと楽しそうに言ってくれないと嘘かと思うわよ？」
「申し訳ございません……」
そう言って、自分の頬をガラス細工のように細く冷たい指で引っ張ってくる幽々子殿。
こちらの考えていることなどお見通しということなのだろう。
「そう言えば、妖忌は何か分からなくて怖かった経験とかないの？　あ、別に私が分からなくて怖かったとか言ってもいいわよ」
「幽々子殿……妖忌殿が困ります故に冗談は程々に」
「大丈夫よ。これぐらいの冗談はいつものことだから」
幽々子殿の言う様に確かに表情をピクリとも動かさない妖忌殿。内心ではどう思っているかは分からないが、この主従にとっては主の自虐は慣れたことなのだろう。
「私にも分からないことはそれこそ山のようにあります。だとしても――」
ひらりと、風に乗って流れてきた桜の花びら。
妖忌殿はそれを目にとめるや否や、銀閃を走らせる。
「――斬れば分かります」
花びらが４つに割れて地面へと落ちていく。
それがしの目にはいつ刃が花びらを通ったのかも分からぬ程の早業。

「物騒ねぇ。何でもかんでも斬っていたら勿体ないわよ、妖忌」
だとしても、幽々子殿には見慣れたものなのか、のんびりとした口調でそんなことを口にするだけである。そんな自らの主の姿に妖忌殿は呆れた様に少し溜息をつき、刀を一度下ろして話し出す。
「どれだけ悩んだところで分からぬものは分からぬのです。始めてみなければ分からない。
何ができるかを悩むよりも、何か行動を起こし、間違っていても後で悔やめば良い。
斬れるか斬れぬかも実際に斬らなければ分からない。まずは行動をすることが肝要。
故に斬れば分かるということです、お嬢様」
「つまり案ずるよりも産むが易しってことね」
幽々子殿の言葉に無言で頷き、再び剣の修練に戻る妖忌殿。
『斬ればわかる』非常に含蓄のある言葉で、まさに妖忌殿の人生を表しているようだ。
やはり何かの道を極めんとする人々の話はためになる。
「でも、悩むよりも行動をしろっていうのを不人さんに当てはめると、どうなるのかしら？」
ふと、幽々子殿がそんなことを尋ねてくる。いや、呟いていると言うべきだろうか。
「自分が何者か考えるより――――自分で何者かを決めるってことかしら」

「自分で…自分を決める…？」

その言葉に先日、伊吹萃香殿に言われた言葉を思い出す。

『人間は自分が何者かを決めることが出来る存在なのさ』。

その時は何も思わなかったが、今になって思えばこれは大切な言葉ではないのか。

自分は今まで自身が何者かを決めたことはない。それは〝どっちつかず〟なので仕方がない。

だが、逆説的に考えれば〝自分が何者かを決めることが出来れば〟人間となれるのではないか？

他人に理由を求めるのではなく、自らの意志でもって自身が何者かを証明する。

なるほど、強く美しい生き方だ。この強い意志こそが人間の真骨頂かもしれない。

しかし、それは誰にでも出来るようなことなのだろうか？

「でも、自分が何者かを決める…ね。できることなら蝶になってみたいけど、それは無理そうね」

一瞬だけ瞳に影を落とし、何物にも縛られずに宙に舞う蝶を見つめる幽々子殿。

「人はなりたいものになれる可能性を秘めている。でも、そのためにはとてつもない勇気と力がいる。やっぱり私は私から変われそうにないわ」

寂しそうに、それでいてどこか諦観が籠る声で幽々子殿が呟く。

そのもの悲しさのあまりに妖忌殿の剣先が微かにぶれる。
それがしも何も言えずに黙り込んでしまう。
だが、しかし。
今の自分が何者だったかを思い出し、死にたくないと叫ぶ心を抑えて彼女の手を握りしめる。
「不人(ふひと)さん…？」
キョトンとした顔でこちらを見つめてくる幽々子殿。
子どものようで非常に愛らしく思わず眺めていたくなるが、今重要なのはそこではない。
「確かに蝶にはなれないかもしれません。しかし、幽々子殿は少なくとも1つはなりたいものになっていますぞ」
「そんなものあったかしら？」
「お忘れですか？　先日、『嫁になりたかった』と言っておられたではありませんか」
あ、と可愛らしい音が淡いさくら色の唇からこぼれ落ちる。
ついで、嬉しそうな笑い声。どうやら気づいてもらえたようだ。
「ふふふ……確かに、ちゃんとお嫁さんにはなれているわね、旦那様？」
「ええ、何もかも叶うわけではありませんが、何もかも叶わないわけではありません」

「そうね。そう考えると私は幸せ者ね」
そう言って、自らの指をそれがしの指に絡ませてくる幽々子殿。
彼女の常人よりも低く、それでいて温もりを感じる体温が手を通して伝わってくる。
「……後3日で桜は満開になるかしら」
「…？　恐らくは」
「ふふ、それまでは仲睦まじく居ましょう、旦那様」
「はい、もちろんです」
「嬉しいわ。さてと、そろそろお夕飯の準備をしないと」
今にも散ってしまいそうな桜のような笑みを見せ、幽々子殿は手を解いて立ち上がる。
それがしは離れていく彼女の温もりを名残惜しく思いながら、内心で首を捻る。
彼女は何故、婚姻期間に――――7日間などという期限を設けたのだろうかと。

5日目の夜、幽々子殿が眠りに落ちた後、それがしは庭に出ていた。
目の前には7割近くの花が咲いた桜に、後少しで満ちるであろう月。
相も変わらず桜を見ると死にたくなるが、能力である〝生への執着〟でそれを押さえ

つける。

こうすれば、ほとんど人が来ないこの場所は1人で考え事をするにはうってつけの環境となる。

「結局の所、それがしは何者なのだろうな」

改めて自分がここに来た理由を思い起こす。自分が作り出された役目を知ることが出来れば、おのずと何者かが分かると思っていた。しかし、創造主は既にこの世におらず、代わりに幽々子殿から婿になるという役目を承った。

初日はこの役目を全うしさえすれば、それで良いのだと考えていた。だが、幽々子殿と過ごしていく内に疑問が生まれた。この役割を終えた時、本当に自分は何者かになれているのだろうかと。そもそも、何故それがしは〝どっちつかず〟などになったのだろうかと疑問を抱いていた。

「このままで良いのだろうか…。このような疑念を抱いたままで幽々子殿の願いを叶えられるのだろうか」

そして何よりも気がかりなのは、主であり妻である彼女の願いに応えられているかである。

そもそもからして、自分の正体を知りたいという理由のために夫になるのは不誠実ではないか。

幽々子殿は特別な在り方ではなく、当たり前の夫婦関係を望んでいるはずだ。
だというのに、それがしは自分の都合しか考えずに彼女に接していた。
これは良い夫婦とは言えないだろう。真に夫としてあるならば。
他の何よりも彼女を愛しているべきだ。
「自分以上に彼女を愛することが出来るだろうか。自らが何者かすら分からないそれがしに」
自分が何者か分からなければ、幽々子殿と比較することすらできない。
やはり、そこをはっきりさせなければ幽々子殿を愛するために、前へと進むことは不可能だ。
「……自分が何者なのかを何としても見つけ出さねば」
幽々子殿の願いを叶えるという覚悟を新たに月へ呟く。とは言っても、覚悟を新たにしただけではどうしようもない。そう考え、自嘲するように笑みをこぼした時だった。
「お悩みかしら?」
聞き覚えのある寒気がする程の色気を持つ声。反射的に後ろを振り向くが姿はない。
まさか空耳だったのだろうかと訝(いぶか)しんだところで、今度は前方から声が聞こえてく

る。

「女性が目の前に居るのによそ見なんて酷いことをするのね」

ハッとして前に向き直る。そこには扇子で口元を覆い楽し気に目を細めている女性が居た。

一度見ただけだが、この正体が分からない胡散臭さは見間違えようがない。

「……これはとんだご無礼を。天上の調べもかくやな美しい声が聞こえてきたものでつい気を取られておりました」

「あら、そういったことは愛しの奥方様に囁いてあげるべきではなくて?」

「お言葉ごもっとも。ですが、それがしは何者かも知れぬ声を言い表したまで。それとも貴女は声の正体にお心当たりが?」

「皆目見当もつかないわね、そんな声があるのならぜひ一度聞いてみたいわ」

そうぬけぬけと言いながら女性、八雲紫殿は鈴を転がしたように笑う。

つかみどころがない。話していれば相手の意のままに操られてしまいそうに感じる程だ。

幽々子殿の友人であるらしいが、よく幽々子殿はこの御人と対等に渡り合えるものだと1人感服する。

「それで、それがしに何か用ですかな? 八雲殿」

「あら、名乗った覚えはないのだけど？」
「幽々子殿からご友人だとお聞きしております」
「なるほどね」
　そう言うと、納得したとばかりに扇子をパチンとたたみ、胡散臭い笑みを向けてくる。
「でも、礼儀として一応名乗っておきましょうか。私は八雲紫よ。気軽にゆかりんって呼んでちょうだい」
「既に知っているでしょうがそれがしは不人と申します。よろしく頼みます、紫殿」
「あら、つれないわね。そんなことだと可愛い奥さんに愛想をつかされちゃうわよ」
　渋面を作り、面倒だという様子を隠しもせずに見つめてみるが紫殿に反省した様子はない。
　やはり、好き好んで相手をしたい人物ではないと、これ見よがしに溜息を吐いて見せる。
「で、結局何の用でしょうか？」
「何かお悩みのようだったから、相談に乗ってあげようと思ったのよ」
「はぁ…それはありがたいですが、なぜそのようことを？」
「人として困っている者を助けるのは当然のことでしょう？」
　嘘だ。そもそも人じゃなくて妖怪の間違いだろうと思うが口には出さない。

幽々子殿から聞いたことだが紫殿はスキマ妖怪という妖怪で、様々なものの境界を自在に操ることが出来るらしい。恐らくはいきなり現れたのも、どこか別の場所とこの場所の境界を繋ぎ合わせて直通の道を作り出したからであろう。

「それに……友達のためになることですもの」

ぼそりと何かを紫殿が呟いたようだが、聴覚の境界を弄られたのか上手く聞こえなかった。

「さ、それじゃあ、ゆかりんのお悩み相談と行きましょうか。どうぞお悩みを言ってくださいな」

「……紫殿ならば既に知っているのではないか」

「ふふふ、私は先程来たばかりだから分かるはずがないでしょう?」

こちらをからかっているとしか思えない態度に、何とも言えない気持ちになるが、考えるだけ無駄だと割り切り、素直に語ることにする。

「自分が何者かを早急に明らかにしたいのだ」

「それも奥さんをちゃんと愛すためになんて、幽々子が羨ましいわぁ」

「……」

「あら、そんな『やっぱり、聞いてただろう。分かっているなら言わせるな』なんて顔をされても私には何のことだかさっぱり分からないわ」

この様子では普段の生活すら覗き見られており、知らないことはないのだろうと半ば確信する。

それならばこちらが口を開く必要はないだろう。そんな、拗ねた気分になりつつ紫殿を見る。

こちらが言ったのだから次はあちらが答える番だ。

「でも、そうねぇ。あなたが何者かを答えてあげる前に1つ聞いておきましょうか」

「何をだ？」

「あなたは人間か妖怪、どちらかになりたいと明確に願ったことがある？」

「何を当たり前のことを……？」

そんなことは常日頃から思っていると声に出そうとして、はたと止まる。

自分を知りたい。何者かになりたい。それはそれがしの根本的な願いだ。

だが、自分は今まで明確に願っただろうか。

「何者かを知りたいという願いに嘘はないでしょうね。

でも、あなたは明確にどちらかになりたいとは思ってこなかった。

自分を知ることが出来れば、人間だろうと妖怪だろうと構わない。

だって、不安から逃れたかっただけですもの。どちらかになれればいいだけ。

そんな心があなたの境界をあやふやにし続けてきたのよ」

紫殿の視線が己の全てを見通す様に向けられる。自分が何者かを知ることが出来れば、何者かになれる。今の今までそう考えてきた。だが、実際の所は違ったのだ。何者かを知ったところでどちらかになることはない。何故ならこの身は。

「人と妖の境界で彷徨うあなたは――― 〝どっちつかず〟でしかないのよ」

〝どっちつかず〟。

最初から、少なくとも伊吹萃香殿に会ったあの日から答えは知っていたのだ。

ただ、漠然とそんな存在があるはずがないと思い込んで、真実を見落とし続けていただけ。

「そして、どっちつかずになった理由はきっと――」

「――人にて人ならず（人不人）、鬼にて鬼ならず（鬼不鬼）」

「…ええ、あなたは幽々子の父親が残した言葉を、自分の役目と受け取ったのでしょうね」

そう、この身は頭につけた帽子が見つからぬと探し回る滑稽な道化に過ぎなかったのだ。

主に役割を与えられなかった？　否、西行殿は与えてくださっていたのである。

人でも妖でもない〝どっちつかず〟という確かな役割を。
「何者かを知ったところで何者かになれるはずもない。初めから何者でもないのだから」
つまりはそういうことだったのだろう。ゆっくりと肩から荷を下ろす様に息を吐いて座り込む。肉体的には疲れてなどいない。だが、心が立ち止まらせてくれと言ったので腰を落ち着けたのである。
「……大丈夫かしら？」
「なんだ、からかいはせぬのか？」
「失礼ね。人が落ち込んでいるところに塩を塗るような趣味はないわ」
「そうか、それは安心した」
ここに来て初めて紫殿の表情が澄ましたものから驚いたものに変わる。
どうやら、紫殿はそれがしの心が砕けたと思っているらしいがそれは違う。
単純にほんの少し休憩をするために座っただけだ。
それを示す様に足にグッと力を入れて飛び上がる様に立ち上がってみせる。
「さて、自分が何者か分かったのだから幽々子殿のために何ができるか考えるとしよう」
「……空元気じゃないわね。開き直ったってことかしら？」
「結果はどうあれ、それがしが悩み続けてきたものは無くなったのだ。気分も軽くなる」

「〝どっちつかず〟なことに変わりはないわよ。それともその答えでも不安は消えたのかしら」
「いや、不安は減ったが消えたわけではない。しかし、どっちつかずでない何かになる道はあるのだろう?」
そう確信した口調で問いかけると紫殿が感心したように微笑む。
相も変わらずに胡散臭い笑みだが、どこか優しさを含んだものにも見えるから不思議だ。
「正解よ、あなたは妖怪のようにに誰かに決められた存在じゃない。自分で何者かを決めることができる人間に近い存在。まあ、そうでないなら〝どっちつかず〟でなく、ただの正体が分からない妖怪になっていただけだから当然と言えば当然ね」
やはり幽々子殿にそれがしの素性を話した時にも盗み聞きしていたのだろう。
そうでなければ知り得ない情報を紫殿が語るがもはやツッコむ気も起きない。
何より、今はそれ以上に大切なことがあるのだから。
「初めは人間として生まれたのだろう。だが、どちらでもないものになり一度は遠回りをした。しかし、それでも再び自分が何者かを決めることができる権利を与えられたそれがしは幸せ者だ」
幽々子殿の願いを最高の形で叶える。今のそれがしにそれ以上に大切なことはない。

「……覚えておきなさい。必要なのは何になりたいかという自分の強い意志よ」
「貴重な助言、感謝いたす」
「どういたしまして。それじゃあ、幽々子を頼むわね。泣かせたりしたら許さないわよ」
「肝に銘じておこう」
　こちらの悩みが解消したからか、それとも言いたいことを言い終えたからかスキマの中に消えていく紫殿。そんな姿を見ているとふとした疑問が湧き、消える前に尋ねてみることにする。
「紫殿」
「なにかしら」
「何故それがしに手助けなどを?」
　特に意味のある質問ではない。
　また煙に巻かれるような言葉でかわされてしまうだろうと思っていた。だが。
「……少しでもあの子に幸せであって欲しいからよ」
　返ってきたのは良く言えば純粋な、悪く言えば当たり障りのない言葉。
　だというのに、去り際に見せた紫殿の悲しそうな顔が妙に印象に残るのだった。

婿になって6日目。明日には桜が満開となり、月も満月を迎えるだろうという日。
それがしは窮地に追い込まれていた。
「私に黙ってこっそり紫と会うなんて酷いわ」
「いや、やましいことは一切ありません」
「あら、私はそう言ったことは一言も言ってないんだけど。本当に何かやましいことがあるの？」
「い、いえ、そういうわけでは」
何故か紫殿と会っていたことが幽々子殿に伝わっていたのは、別に大したことではない。
紫殿が話しに来たのだろうと思えば何も不思議なことではないはずだ。
しかし、それを知った幽々子殿がやたら不機嫌なのはどういうことか。
頬を膨らませて如何にも怒っていますと表現する姿は非常に愛らしいが、心臓に悪い。
さらに心なしか、いつもよりも死に誘う力が強く感じるのは気のせいだと信じたい。
「女の子は好きな殿方が他の女の子とコッソリ会ってたら不安になるのよ」

「も、申し訳ございません」
「それに加えて私だけ仲間外れなんて寂しいわ」
「妖忌殿も居たわけではありませんが……」
「分かった、不人（ふひと）さん？」
「は、はい」
　どうして怒った女性というのはこうも怖いのだろうか。特に幽々子殿は表情自体はそれほど変わっていないのだが、雰囲気がおどろおどろしいものに変わっているので非常に恐ろしい。元気があるのはいいことであるが、いつもの儚げな彼女はどこに行ったのだろうか。早急に帰って来て欲しいものだ。
「反省している？」
「反省しております」
「私に悪いと思ってる？」
「悪いと思っております」
「じゃあ、今日は私の言うことを何でも聞いてくれる？」
「わ、わかりました」
　肯定の言葉以外は許されない圧力を受け、ただひたすらに首を縦に振る。
　何を要求されるか知らないが、甘んじて受け入れる以外の選択肢はないのだ。

「それじゃあ、まずは何をしてもらおうかしら」
やけに真剣に考え込む幽々子殿の姿に死刑宣告を待つ罪人とはこのような気持ちなのかと現実逃避を行う。しかし、そのような逃避も大した意味も持たず、ポンと手を叩く音で現実に引き戻されてしまう。一体何をされるのかとビクビクとするそれがしを置いて幽々子殿は立ち上がる。
そして、正座しているそれがしのすぐ前に座り、幽々子殿はためらいなくその膝に頭を乗せる。
……これは所謂膝枕と言うものであろうか。
「硬いわ。それに高くて寝づらい」
「では、座布団でも持ってきましょうか?」
「それよりも、正座を崩してくれる?」
「分かりました」
自分からやっておいて失礼なものだなと思いながらも、幽々子殿が寝やすいように足を崩す。幽々子殿はしばらくそれがしの膝の上で寝やすい体勢を探していたが、やがて落ち着く体勢を見つけたらしく、動きを止める。
「頭を撫でて」
「分かりました」

しかし、彼女は要求をまだ終える気が無いらしい。
今度は頭を撫でろとせっついてきたので、要求通りに撫でてみる。
「少し強すぎるわ。髪の毛は女性の命なんだからもっと優しく扱って」
「こう…でしょうか？」
「うん。それぐらいでちょうどいいわ」
絹のように滑らかで、それでいて花のように艶やかな髪を撫でる。
それを境にしばらくの間、会話が無くなる。
だが、気まずくなるような沈黙ではない。
ただ、春のうららかな日差しのような穏やかさがあるだけだ。
気を抜けばそのまま夢の中へと旅立ってしまいそうになる程の心地よさ。
今だけは、今だけは、彼女から発せられる死の呪いすら忘れてしまえる。
そんな夢か現か分からぬひと時。
「ねえ…」
「なんでしょうか？」
それを破ったのは幽々子殿の囁くような声だった。
「愛って何なのかしら？」
唐突な問いかけに答えを返すことが出来ずに、幽々子殿をまじまじと見つめてしま

う。
「近くで触れ合っても見えないし、感じることもできない。いくら雄弁に語っても嘘か本当かは分からない」
「では愛とは存在しないものなのでしょうか?」
「いいえ、きっと存在するわ。誰の目に見えずとも、誰の耳に入らずとも愛はある。でもそれが何かを証明する手段が分からないの」
幽々子殿はぼんやりとした瞳で虚空(こくう)を見つめながら、頭を撫でていたそれがしの手を取る。
常人よりも体温が低くひんやりとした彼女の手が、優しくそれがしの手を撫でる。
「多くの人は自分が愛している人をこの世で最も大切なものと言うわ」
「自分が最も大切にしているものならば確かに愛と呼べましょう」
「最も大切にしているのだから、その人のためならどんなことだってできる」
「ええ、そうでしょう」
親を大切にする者は親を養うためにならば盗みすら犯すだろう。
妻を大切にする者は妻を守るためにならば殺しすら犯すだろう。
子を大切にする者は子を生かすためになら命すら捨てるだろう。
愛のためならば人は容易く鬼にもなる。愛の向かう先は人それぞれだが、そこに貴賤(きせん)

はない。
　そして、愛の向かう先とは何も他人だけではない。
「〝生にしがみつく〟あなたにとって最も大切なものは自分の命かしら」
　拗ねたような声を出しながら幽々子殿がそれがしの手をつねってくる。軽い痛みが走るがそれを咎めることはしない。これはきっと、愛の向かう先が最初から自分だと決まりきっているそれがしへの仕置きなのだろうから。
「ねえ…あなたは愛って何だと思う？」
　そして再びぶつけられる質問。不意に自分の唇が酷く乾いていることに気づき、舌で湿らせる。例え、彼女の納得のいく答えでなくとも応えなければならない。そう覚悟を決め、声がしっかりと出せるように大きく口を開く。
「愛とは――――〝執着〟だと考えます」
「執着？　どうしてそう思うのかしら？」
　膝の上でコロコロと笑いながら幽々子殿が説明を求めてくる。
　そんな彼女の髪を再び撫で始めながら、それがしは言葉を続けていく。
「それがしの最も大切なもの、つまり愛するものが自身の命だというのならば、それは生への執着に他なりません。命に危機が訪れれば、この身は如何なる方法をもってしても生き延びようとするでしょう。それは絶対に命を手離したくないが故にです。この

手を離したくないという感情こそが執着であり、愛と考えます」
何者にも渡したくない。全てを引き換えにしてでも守る。失えば生きていけない。
これは全て、愛という名の執着なのだ。
狂愛であろうと、純愛であろうと、対象への執着無しには語れない。
大なり小なりの執着があるからこそ、それが愛となり憎しみとなる。
愛という強い感情を生み出すには、その対象に執着していなくてならない。
そもそも、何の執着も見出せないというのは何物にも無関心ということだ。
無関心なものに対して愛を抱くことなど出来るはずがない。
「国造りの神、イザナギとイザナミの愛を例にすれば分かりやすいでしょうか。イザナギは死んだイザナミへの執愛着を捨てきれずに、黄泉の国にまで会いに行った。結果としては完全な離別となりましたが、イザナギの愛が黄泉の国にまで行くという強い執着であったことは否定できないはずです」
偉大なる神々ですら愛を執着という形で表していた。
ならば卑小なるこの身が愛を執着で表したとしても何も問題はないであろう。
「……そうね。確かに執着なのかもしれないわね」
「お気に召しましたか？」
「ええ、納得のいく答えよ。だからついでに聞いておくわ」

「なんでしょうか」
「あなたは私にどれぐらい執着しているの？」
　その質問はこの話を始めた時から来ると分かっていたものだ。
　要するに『あなたはどれぐらい私を愛しているの？』といういじらしい質問である。
　そのため、答えは話している間に考えておいたので素早く答える。
「絶対に手放したくない。そう思えるほどには」
「じゃあ、自分の命とどっちが大切？」
「……分かりません」
「あら？」
　分からないという答えに意外そうに目を丸くする幽々子殿。
　恐らくはそれがしが自分の命と答えると思っていたのだろう。
　しかし、今のそれがしは命への執着が少し薄まっているように感じられるのだ。
　まるで、それ以上に大切なものができたとでも言うように。
「もし、幽々子殿が死ねばそれがしはイザナギのように黄泉の国へと足を運んでしまうかもしれませんな」
「ふふふ、そう言ってもらえると嬉しいわ。でも、イザナミみたいに見捨てられるのは嫌よ。イザナギも黄泉の国まで来ておいて酷いことをするわよね」

「恐らくこの話は生者と死者は決して相容れてはならないという教訓を残したものでしょうから」

残された者が先に逝った者達を追わない様に。反対に先に逝った者が帰りたいと思わない様に。

イザナギとイザナミの話は生者と死者は交わってはならないという教訓だ。

故に2人が再び共に居ることが出来る未来はどこにもないのだ。

「そうね…生者と死者は共に居ることは出来ない。でも、同じ死者同士ならどうかしら」

「幽々子殿…？」

不意に寝ていたそれがしの膝の上から起き上がり、顔を近づけてくる幽々子殿。

その事に戸惑い、体を強張らせると今度は頬に手を添えられ顔を固定される。

そして――――魂を吸い出さんばかりの接吻（せっぷん）が1つ贈られる。

「ねえ…もし、私が死ぬとしたらその時は――――あなたも一緒に死んでくれる？」

全身が凍り付く程に冷たい笑みと共に告げられた言葉。

まるで死の宣告を受けているようである。

しかし、それよりもなお目を引いたのは、今にも泣きだしてしまいそうに震える瞳だ。

怖くて怖くて仕方がないのに、必死に怯えを押し隠そうとする弱者の瞳。
それを見てしまったために、それがしは何も言葉を返すことが出来なかった。
「……冗談よ、忘れてちょうだい」
「……」
「それじゃあ、夜も遅いしそろそろ休むわ。おやすみなさい」
逃げるように足早で去っていく幽々子殿の表情は見えない。
しかし、いつものと違うのだけは見なくともわかる。
きっとあれは隠していたものが思いがけずに出てきてしまったゆえの動揺。
「幽々子殿……」
思えば最初からおかしな点は多かった。
婿になれという命を出したというのに期間は7日間だけ。
どこか時間が無いとばかりに焦りを感じながら家事を行う姿。
生に憂いを感じさせる程の生命力の無さ。
特に関わりのなかった紫殿からの唐突な手助け。
そして、何より7日目に満開となる桜に、満月に近づく月。
【願はくは　花の下にて　春死なむ　そのきさらぎの　望月のころ】
明日はまさにこの歌の条件を満たすにはピッタリの日だ。

桜が咲き誇る満月の夜の下で、その生涯を終わらせる日には。

「幽々子殿、あなたは――――」

――――明日の夜に自らの生涯を終わらせるつもりなのですか。

最終話：満開

7日目。地には満開の桜、天には欠けることのない満月。
風流に疎い人間であっても思わずため息をこぼしてしまう程に美しい景色だ。
「綺麗な景色よね……」
「幽々子殿も負けず劣らずにお美しいですよ」
「ふふふ…初めとは違ってお世辞がうまくなったわね」
「本心からです」
「お上手ね」
酒を酌み交わしながら2人で花見をする。
どんな選択を選ぼうともこれが2人で呑む最後の酒になることだろう。
それが分かっているからか、普段は体に気遣って呑まない酒を幽々子殿も飲んでいる。
そして、それを止めに来る存在は居ない。
従者の妖忌殿も、友人である紫殿も、隣で呑んでいる夫であるそれがしも。
彼女の最後を悟り、受け入れているのだ。

「ねえ…」
「はい」
「あなたはこの7日間はどうだったかしら?」
ポツリと、耳を澄ませていなければ聞き落としてしまいそうな程に小さな問いかけ。
それを受けてそれがしは逆にハッキリとした声で答える。
「幸せでした。これからも続けていきたい程に」
「本当に…?」
「嘘をつく理由がありません。反対に幽々子殿はどうでしたか?」
逆に問いかけ返すと、幽々子殿は盃の中に映る月を見つめていた。否、それは正しくないだろう。彼女はきっと水面に月ではなく7日間の記憶を映し出しているのだから。
「私も…幸せよ。ええ、嘘なんかじゃないわ」
「それは良かった」
「ちゃんとできたかは分からないけど、お嫁さんらしいことは全部やれたし、それに思った以上に素敵な旦那様に恵まれたもの」
クスクスと笑いながらこちらに視線に送ってくる幽々子殿。思った以上という所にからかいの意味を込めているだろうが、今のそれがしにはそれすらも愛おしく感じられるので効果はない。それが分かったのか、幽々子殿は困ったように笑いながら酒を口に

運ぶ。
「最初はもっとぎこちない関係で終わると思ってたわ」
「そちらの方がよろしかったですか？」
「もちろん、今の関係の方が好きよ」
「それがしも同じ考えです」
　そう言って2人で笑い合う。夫婦の関係はそれこそ夫婦の数だけ種類があるだろう。
　だが、それがしはこの関係で良かったと心から思っている。きっとそれは幽々子殿もだろう。
「あの日あなたが来てくれて本当によかったわ」
「紫殿がスキマに落としてくれたおかげですな」
「だとすると、紫にはもっと感謝しないといけないわね」
「そうですね」
　恐らくは紫殿が居なければあの日、それがしは妖忌殿に追い返されていただろう。
　そう考えれば、紫殿には感謝しなければならない。
　いや、そもそも紫殿はそれがしが死なぬことを見抜いて、幽々子殿の話し相手にしようとしたのだろう。結果的に夫婦になったのは流石に予想外であろうが。
「……本当に幸せな日々だったわ。だから、これでもう」

思い残すことはない。
そう無意識に続けようとしていたのか、ハッとして盃で口を隠す幽々子殿。
彼女の仕草に、やはり最後まで隠し通すつもりなのだろうと察する。
だが、その思惑に乗ってあげるつもりは自分にはない。もう決めたのだ。
「……幽々子殿。昨日それがしに尋ねられたことは覚えていますか？」
『あなたも一緒に死んでくれる』って聞いたこと？　あれは冗談だって言ったはずよ」
「おや、それがしはまだ何のことか言っていませんが？」
「意地悪な人ね……」
自分から口にしたことで、そのことを気にしているとバラしてしまった幽々子殿が、恨めしそうにこちらを見てくるが笑って受け流す。日頃、からかわれている分のお返しと考えてもらおう。
「昨日から今に至るまで返事を考えていましたが、今ようやく答えが出ました」
「その割には答えを誘導された気がするのだけど」
「失礼、今ではなくほんの数刻前です」
「嘘は浮気の元よ。あなたの将来が不安だわ」
完全に自分との関係は今日で終わりだという口調の幽々子殿。
まあ、彼女は今日で人生を終わらせるつもりなのだから、未来など考えられないのだ

ろうが。
「浮気の心配はございませんよ」
「あら、断言するのね」
「ええ、簡単な理由です。幽々子殿が死ぬのなら――それがしも共に死にますので」
瞬間、幽々子殿の表情が凍りつく。疑っているのだろう。
それがしが本気で言っているのか、比喩表現で言っているのか。
何より、自分が今から死ぬのを知っているかどうかを疑っている。
分からないという不安は耐え難いものだ。だから、隠さずに伝えるとしよう。

「【願はくは　花の下にて　春死なむ　そのきさらぎの　望月のころ】
……まさに今日のような日ですな」

これで全てが伝わるだろう。余計な言葉は必要ない。後はジッと幽々子殿を見つめるだけだ。彼女は初めのうちは何とか誤魔化せないかと考えていたようだが、やがて不可能だと悟ったのかゆっくりと溜息を吐く。
「はぁ…いつから気づいてたのかしら？」
「つい先日」

「やっぱり、変なことを言ったからバレたのね」
「まあ、他にも手掛かりはありましたので。それだけではありません」
「どの道バレたことには変わらないわ」
少し拗ねた様に唇を尖らせる幽々子殿の姿に笑いながら、肩が触れ合う程に距離を詰める。
「何故隠しておられたのですか？」
「どうして死のうとするかは聞かないのね」
「これでも夫ですので、聞かずとも分かります」
ただ存在するだけで人を殺す化け物となってしまった我が身を憂いて。
もしくは、亡き西行殿が愛した桜が西行妖（人食い桜）になったことを憂いてか。
7日しか共に居ないそれがしでも、情報さえあれば思いつくことだ。
そしてそれは、幽々子殿がどうしようもなく重く大きな苦悩を抱えていることに他ならない。
「……7日だけ結婚して欲しいだなんて、私の勝手なお願いだから。それが終わった後にあなたに変な重荷を背負わせたくなくて黙っていたのよ」
「何も知らずに連れ添った女性に自害される方が、よほど重荷を背負う気がしますがな」
「そんなこと言わないで。これでも一生懸命考えたんだから」

少しバツが悪そうにしながらも、自分は悪くないという態度を取る幽々子殿。
そんな可愛らしい姿を愛でるように、それがしは彼女の手を握りしめる。
「ねえ…本当に一緒に死ぬつもり？」
「死にます」
「黄泉路までついてくるの？」
「共に逝きましょう」
「冗談じゃなくて？」
「この顔が冗談に見えますか？」
「自分の目が信じられないわ」
「それは困った」
カラカラと笑いながらおどけて見せるが、幽々子殿は顔をしかめたままだ。
これではいけない。最後の日なのだから、良く笑うことに越したことはない。
もっとも、共に死ぬと言われても普通の人間は笑う前に困って当然だろうが。
「どうして…どうしてそんなことをするの？」
「決めたのです。西行寺幽々子の夫として生き、死ぬことを」
難しい理由など何もない。自分が真の意味で彼女の夫となりたいと願ったからだ。
この愛しい女性の傍に最後まで、否、最後が終わってもなお寄り添いたいと、そう願っ

た。

　そうだ。彼女のためならば命すら惜しくなどはない。

「どうやらこの身は存外情に厚かったようです。妻を失っては生きてはいけぬと思う程には」

「でも…でも…あなたの本質的に〝生にしがみつく〟はずよ。死のうと思っても死ねないわ」

「そうでもありません。それがしの能力は能力とは名ばかりの生への執着。言うなれば、生きたいという意志の力に過ぎません。ならば、それ以上に強い意志があれば死ぬことも可能でしょう」

　何とかそれがしが意見を翻すことを祈り、必死になって説得を試みる幽々子殿。

　その想いは痛い程に伝わってくるが、それがしも考えを変えるつもりはない。

「あなたには…人間として普通に生きていく未来も…妖怪として滅びぬ生を送る未来もあるのよ？　私とは違うわ！　あなたは希望を持って生きていくことが出来るのよ!!」

　肩を震わせながら苦しそうな叫び声を上げる幽々子殿。もう、叫ぶことすら辛い身体であるにも関わらずにそれがしのために必死になって頂ける。その事実がそれがしの共に逝くという意志をさらに固めさせるのを彼女は分かっているのであろうか。

「それなのに…どうして…っ」

遂に体力的にも精神的にも耐えられなくなったのか、それがしの胸に縋りつくように体重を預けてくる幽々子殿。その余りにも華奢な体を抱き寄せながら、それがしは小さく、しかしハッキリと口を開く。

「幽々子殿、人は――――死にます」

胸の中で息を呑む声が聞こえてくるが、敢えて聞こえないふりをして続ける。

「今から人を死に誘うあなたにとって惨(むご)いことを言いますが、どうかお許しください。人も妖も、形あるものは全てがいずれは滅びる存在なのです。

ここで死のうとも、人として往生を迎えようとも、妖として１０００年先に滅びようとも。

死ぬのです。あなた(桜)が死に誘った者達とて例外はいなかった。

生命とは生まれたその時より滅びの運命を背負うもの。

あなたが能力を持っていようがいまいが、その運命が変わることはないのです」

ふるふると体を震わせて否定の意思を示す彼女の髪を優しく撫でる。自分は彼女が傷つくことを言っているのだろう。だが、同時に言わなくてはならないことでもある。彼女は人を死に誘ってきた。もちろん、それは良くないことだろう。しかし、全てが彼女のせいであるわけでもないのだ。

「それがしもそうです。ここで死なずともいつかは死ぬのです。そして、必ず死に場所

を求める。
命は生まれる場所は選べない。しかし、死に場所は選べる。故に誇れる死に場所を求めます。
布団の上での往生か、戦場での討ち死にか、はたまた桜の下での終焉か。
人それぞれが求める死に場所がありますが、それがしにとっての死に場所は――」
「それが私の隣だって…私があなたまで――死に誘ったって言うの？」
幽々子殿が今にも泣きだしそうなくぐもった声を出す。
まるで、やっと見つけた安住の地を奪い取られるかのような悲痛な声だ。
そんな彼女の余りにも残酷な問いかけにそれがしは。
「いいえ、それがしは――愛に誘われたのです」
否定の言葉を返す。
「愛…？」
「はい。そもそも誘われるという表現がおかしい。追うのです。自らの意思であなたへの愛だけを頼りに黄泉の国、地獄の果てまで追うのです」
それがしの胸から顔を離し、キョトンとした上目遣いでこちらを見つめる幽々子殿。
そんな彼女の瞳を真っすぐに見つめ返しながらそれがしは強く語っていく。
「先日話した通り、それがしの愛とは執着。死しても幽々子殿を手放すつもりは毛頭あ

りません」
「……私が生まれ変わっても？」
「例え、幾千、幾億の輪廻を巡ったとしても必ずあなたの隣に立ちます。誰にも渡しはしません」
勢いよく告げると、ようやっと幽々子殿の顔が綻ぶ。
そして、先程の悲しみなど彼方に消えたとでも言わんばかりに笑い始める。
「ふふふ……重いわ。凄く重いわよ、あなたの愛」
「それがしの生への執着すら超える愛ですので、当然」
「それだけ重い愛だと何をやっても退かせられる気がしないわ」
「運が悪かったと思ってくだされ」
「いいえ。私———とっても運が良いわ」
花が咲いたような笑顔見せ、それがしの頬を撫でる幽々子殿。
その手は、どこかいつもよりも熱が強いように感じられた。
「私も今からあなたに酷いことを言うから許してね」
「はい」
「お婿さんにするのはね、誰でもよかったの」
誰でも良かった。その言葉だけ捉えれば、自分が必要とされていない様に感じられる

だろう。

しかし、彼女の表情は自惚れでなければ、かけがえのないものを見つめているものだ。

「私の隣に居て死なない人ならあなたでなくてもよかった」

悪戯気に仕返しをするように笑う幽々子殿。

「でも」

その表情を見ながら自然と微笑むそれがし。

「今はあなたじゃないとダメだって心の底から言えるわ」

言葉と共に送られる軽い口づけ。

それを受けてそれがしも思う。自分も彼女でなければダメだ。最初は西行殿が死んでいたことに絶望しかけたが、今になって思えばそれは運命だったのかもしれない。自分が何者かを求めたのも、幽々子殿から役目を承ったのも、そもそも自分が生み出されたのも、全てはこの瞬間のためだったのではないだろうか。

「私と出会ってくれて、私の夫になってくれて、本当にありがとう……それしか言えないわ」

満面の笑みを浮かべての感謝の言葉。

それは咲き誇る桜に劣ることのない美しさで。

同時に桜以上の儚さを感じさせるものだった。

だが、儚さなど自分達にとっては何の障害にもならない。
花が散るのならば共にこの命を散らそう。地に落ち土に還るならこの身も土となろう。
夏が過ぎ、秋を迎え、冬を越え、再び咲き誇る春が来ればこの身は何度でも隣に立つ。
幾度の季節を廻り、いつの日にか木が朽ち果てる日が来てもなお、傍に寄り添い続ける。
「ふふふ…私ったらいけないわ」
「何がでしょうか？」
「だって、人を殺すのが嫌で死のうとしているくせに……」
幽々子殿の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちていく。
「あなたが一緒に死んでくれることが、嬉しくて仕方がないの」
泣き笑い。
みっともなく映るかもしれないその顔は酷く美しくて、思わず自分の瞳も潤んでしまう。
いや、頬を伝う温かい感触からして、それがしも泣いているのだろう。

「本当はね……1人で死ぬのは怖くて寂しかったの」
「大丈夫です。それがしが決して1人にはさせません」
「嬉しいわ。…じゃあ、そろそろ」
「はい…それでは」
『共に逝きましょうか』
どこに向かうかなど語らずとも分かる。立ち上がり、寄り添うように一歩、また一歩と桜と満月の下へ足を進める。恐怖はない。それどころか、どこか安らぎのようなものすら感じられる。
「でも……少し短かったわね」
桜の木の下に着き、懐から準備しておいた短刀を取り出したところで幽々子殿がポツリと呟く。
気になり、何のことだと問いかける。
「結婚生活よ。今更だけど7日間は短く感じるわ」
「それだけ幸せだったということでしょう」
「そうね。本当に幸せだったわ」
穏やかな表情、しかし少しだけ寂しさを感じさせる顔を見て一度短刀を下ろす。
幽々子殿に伝えなければならない。これは終わりではないのだと。

「桜が咲き誇っていられるのも7日間。
世の人々は何故咲き続けないのだと、今の幽々子殿と同じように嘆き悲しみます。
しかし、こうも言います。――必ず、来世(来年)も花を咲かすのだと」
その発想はなかったと驚きつつも、穏やかな笑みを湛える幽々子殿。
「……そうね。来世(来年)があるわよね」
「はい、来世(来年)があります」
もう悩みも不安もない。
全ての準備は整ったのだと大丈夫だと理解し、短刀を握りなおす。
そこへ、幽々子殿が口を開く。
「ねえ、不人(ふひと)さん」
「何でしょうか？」
恐らくはこれが最後の言葉になる。
だというのに、お互いの口から出た言葉は驚くほどに安らかなものであった。
「――愛(あい)しているわ」
満面の笑みで告げられたほんの7文字の言葉。

だというのに全ての感情が、想いが伝わってくる。
ああ…そうだ。これが愛し合っているということなのだろう。
ならば、それがしが返すべき言葉も7文字で十分。

「――――愛(あい)しています」

そう、全ての想いを込めた言葉を、今生の終わりに返すのだった。

夜が明け、朝日が闇に隠れていたものを映し出していく。
西行が残した屋敷。西行が愛した桜。そして桜の花びらが降り注ぐその下には。
抱きしめ合いながら息絶える一組の男女。
安らかな表情を浮かべる顔だけを見れば、ただ眠っているようにも見えるだろう。
だが、しかし。その衣を赤く染めあげる黒ずんだ血を見れば既に命が無いことが分かる。
如何なる理由があってか、2人は死して添い遂げることを選んだのか。

事情を知らぬものには理由など到底分かることではない。
しかしながら、理由が分からずとも分かることはある。
２人は最後を迎える刹那の時まで――――愛し合っていたのだと。

ほとけには　　桜の花をたてまつれ　　わが後の世を　　人とぶらはば……

白玉楼（はくぎょくろう）の庭先で亡霊の姫は、書架から見つけた古い記録を読んでいた。
そこにはあることが記されていた。
【西行の娘とその夫、西行妖満開の時、幽明境を分かつ。
その魂、白玉楼中で安らむ様、西行妖の花を封印しこれを持って結界とする。
願うなら、二人分かたれることの無い様、廻（めぐ）る事無き永久の眠りを……】
亡霊の姫は自身が管理する白玉楼の中には、半人半霊の庭師を除いて肉体を持つ者が居ないことを良く知っていた。だというのに、西行妖…咲くことを忘れた桜の下には２人の亡骸が眠っているというのだ。これは明らかに何かがある。亡霊の姫はそう確信

した。

「桜を満開に咲かせてあげれば封印はとけるかしら」

彼女は端的に言えば桜の下で眠る2人を復活させようと思っている。

普段は死霊を操り、人を死に誘うことを行う亡霊の姫君がだ。

皮肉なこともあるものだと自身でも思うが、特に気に留めることはない。

「蘇ったらどんな人達か話してみるのも面白いわね」

何故なら、彼女は興味本位でやっているだけだからだ。成功するに越したことはないが、失敗したとしても彼女に不利益はない。せいぜい彼女の親愛なる庭師が苦労するだけだろう。

「でも」

しかし、実行しようとすると何となしに心に引っかかることがある。

「せっかく2人だけの世界に居るのを呼び出すのはお邪魔かしら」

桜の下で眠るのは夫婦だという。共に死んでいるのだ。それは仲の良い夫婦だったのだろう。

どんな人物だったか気にはなるが、乙女の心情として邪魔されたくないのではとも思う。

「うーん…悩みどころね」

自らの興味を優先するべきか、僅かな良心を守り2人の安寧を祈るか。
色々と考えてみるがなかなか決まらない。
「ねえ、あなたはどう思うかしら」
ならば、人に意見を求めるのも1つの手だろう。
亡霊の姫は振り返り、先程から黙って茶を飲んでいる隣の人物に目を向ける。
そして、その者の名を呼ぶ。

「――――旦那様？」

～おまけ～
五話：幻想郷

幻想郷に春が返ってきた。

帰ってきたであれば詩的な表現で済まされたことだろう。

しかし、今回は違う。文字通りの意味で返ってきたのである。

西行妖を満開にするために幻想郷中から奪われた春が、博麗の巫女により取り返されたのだ。

異変の発端は、西行寺幽々子が西行妖の下に眠る何者かを蘇らせようとしたことである。

そして、庭師である魂魄妖夢（こんぱくようむ）が幻想郷全体から春を奪い去った。

その結果として幻想郷に春が訪れなくなり、それを異変と見なした巫女やその他の人間が冥界の白玉楼にまで赴き、幽々子の企みは阻止されたのがことの顛末（てんまつ）である。

何とも傍迷惑な行為をした幽々子であるが、ここ幻想郷では異変を起こすのは自由であるし、その解決に使う『スペルカードルール』を遵守してさえいれば、人の生き死にが出るわけでもない。そのため、異変を起こした、退治された、だからそれで終わりと

いった後に尾を引かない形で決着している。
　そして、それをより確固とした形として示すためか、はたまた一仕事が終わったからか、異変解決後には異変の首謀者も招いての宴会が博麗神社で開かれる。今回もその例に倣(なら)い幽々子達も招かれての宴会が開かれているのだった。
「やっぱり寒いより暖かい方が過ごしやすくていいわね」
「ああ、いつもは気にしないが待たされた分だけ桜も綺麗に見えるしな」
「そう？　私は例年通りの桜に見えるけど」
「おいおい、そいつは余りにも風情ってもんがないんじゃないか霊夢？」
　宴会の中心地では２人の少女が桜を見ながら酒を呑んでいた。
　１人は絹のように美しい黒髪をリボンでまとめ、脇の空いた紅白の巫女服を着たこの神社の主である博麗霊夢(はくれいれいむ)。２人目はいかにもな魔法使い染みた帽子と白黒のエプロンドレスを身にまとった、太陽のような金髪の少女、霧雨魔理沙(きりさめまりさ)。
　２人は友人と呼ぶべきかライバルと呼ぶべきか分からぬ間柄であるが、こうして絡むことが多く、それなりに気心の知れた仲であることには違いない。そんな彼女達ともう１人の人間が今回の異変の解決に尽力したわけであるが、残りの１人は自らの主の世話で忙しいのかこちらには来ていない。
「風情ねぇ、そんなのは分かる人間だけが味わっていればいいのよ。私はこのお酒を味

わうのに忙しいから」
「ははは！　まあ、さっきはああ言ったが私も花より団子派だ。今日はとことん呑もうぜ」
「二日酔いになっても知らないわよ」
「その時は優しい巫女様に看病してもらうさ」
「お生憎様だけど、幻想郷には自業自得の人間を助ける程お人好しの巫女は居ないわよ」
そうは言うものの呑むのを止める気はないのか、魔理沙の盃に酒を注ぐ霊夢。
そんな折だった。1人の男が2人に話しかけてきたのは。
「もし。博麗霊夢殿と霧雨魔理沙殿とお見受けするが、少々時間を頂いても？」
何者だと目をやる霊夢。
声をかけてきた男は背は普通、顔も目も髪も普通といった一見すると何の特徴もない男だった。
しかし、纏う空気は人間のそれではなく、浮世離れしたものを感じさせる。
「あんたは？」
「それがしは西行寺不人と申す。先日の異変では家内と使用人が迷惑をかけたのでその謝罪に来たのだ」
「そ。なら、これで終わりね。付きまとわれると面倒だから、もう謝らなくていいわよ」

簡単な自己紹介と共に頭を下げる男、不人。
霊夢はそれを適当に流し、魔理沙は驚いたように声を上げる。
「家内って、あの亡霊に旦那なんて居たのかよ!?」
「いかにも。それがしは西行寺幽々子の夫だ」
「マジかよ……亡霊にも夫婦ってあるのか。でも、異変の時には見なかったぞ?」
幽々子の旦那とは思えない程に腰の低い不人の姿に、２人が寄り添う姿が想像できないなと内心で呟く。それと同時に、白玉楼に訪れた際には不人の姿が見えなかったことを疑問に思い尋ねる。
『弾幕ごっこ』は女子供がやるもの。男のそれがしがやるのは不自然極まりないであろう？　故に異変の際は陰ながら見守っていたのだ」
「まあ…そう言われたらそうなんだけどさ」
「第一、それがしは弱いぞ。本気で戦ってもそなたらに勝てるとは思えん」
そう言って肩をすくめてみせる不人。
彼は別に特異な才を持っているわけではないし、戦闘に自信があるわけでもない。
一応は妖忌に剣術を教わったこともあるが、素人に毛が生えた程度だ。
才能が無いとはっきりと告げられたこともある。
「それがしはただの妻と桜をこよなく愛するだけの亡霊なのでな」

「惚気ならよそでやりなさい」
「む、これは失礼した」
興味なさそうに霊夢がしっしとばかりに手を払うが、不人の方は面白そうに笑うだけである。
そんな光景に魔理沙は、また霊夢が人外に好かれているなと心の中で笑う。
いずれ博麗神社から妖怪神社に名前を変える時が来るかもしれない。
「魔理沙、今失礼なこと考えなかった？」
「いや、何も考えてないぜ」
生来の勘の鋭さからか魔理沙の内心に気づき、じろりと睨んでくる霊夢。
それを分厚くなった面の皮で受け流しながらも、魔理沙はやはり霊夢には隠し事などは通用しないなと冷や汗をかく。
「にしても、あんたも謝りに来るぐらいなら最初から止めなさいよ。おかげでこっちは寒い中動き回る羽目になったんだから」
「……止められる機会もあったのは事実なので、そう言われると反論できぬな」
痛いところを突かれたとばかりに苦笑いをする不人。
そんな彼の姿に迷惑料として少しばかり、文句を言わせてもらおうと霊夢は言葉を続ける。

「なに、尻に敷かれてるの？　それとも弱みでも握られてるの？」
「そういうことではなく、純粋に家内が異変を起こすのを楽しんでいたので止め辛かったのだ」
「しっかり弱み握られてるじゃない」
「む？　そのようなことは1つも言ってはいないが…」
「今、何か弱みになること言ってたか？」
はて、自分の話した内容のどこに弱みを握られている要素があっただろうかと首を捻る不人。隣の魔理沙も意味が分からずに頭に疑問符を浮かべているので、霊夢は面倒くさそうにしながらも答えを告げてやる。
「何って、惚れた弱みを握られているじゃないの、あんた」
盃の中の酒を一気に飲み干し、再びつぎ足す霊夢。
相手が楽しんでいるから悪いことだとは思っても止められない。
これを惚れた弱みと言わずに何と言うのか。
そんなことを霊夢が告げたものだから魔理沙は驚きに満ちた顔を浮かべる。
そして、直接言われた不人は。
「惚れた弱み…か。フ、そうかもしれんな」
どこか納得したような顔で柔らかな笑みを浮かべていた。

「どうもそれがしは、妻の願いは極力叶えてやりたいと無意識のうちに思っているようだな」
「仲が良くて何よりね。それで引っ掻き回される方はいい迷惑だけど」
「違いない。ついで、これからも迷惑をかけることになるので先に謝っておこう」
「そこで意地でも止めるって選択をしない所が腹立つわね」
「弱みを握られているからな。妻には勝てんのだ」
一切悪びれることなく惚気てみせる不人の姿に、魔理沙は自分の誤解に気づく。
不人と幽々子は意外な組み合わせでも何でもない。
こいつらの悪びれない所がそっくりで悪い意味でお似合いの夫婦なのだと。
「あ、不人様！　幽々子様が探していましたよ」
霊夢と魔理沙がそんな不人の本質に呆れているところで、彼を呼ぶ妖夢の声が聞こえてくる。
それを聞き、不人は最後にもう一度ゆっくりと頭を下げる。
「そういうわけだ。それがしはこれで失礼させてもらう。魔理沙殿、霊夢殿、どうかこれからも家内と使用人を含めてよろしく頼む」
「おう、よろしくな」
「まあ、やり過ぎないなら付き合ってあげるわよ」

２人の返事に満足したのか、柔らかな笑みを浮かべて背を向ける不人。
そのまま妖夢の下に歩いていこうと足を踏み出すが、何を思ったのかすぐに止めてしまう。
そして、思い出したように問いかけを１つ送る。
「……そなたらは桜は好きか？」
「綺麗だとは思うけど好きでも、嫌いでもないわね」
「ま、私もそんな感じだな」
何ともそっけない返事に苦笑しながらも、答えはどちらでもよかったのか不人は歌を詠む。
【花のごと　世の常ならば　過ぐしてし　昔はまたも　かへりきなまし…】
それは桜への憧れを込めた歌。
たとえ散っても翌年には花を咲かせる桜。
人生もそうであればいいと桜への憧れを描いた歌だ。
「……それがしは桜が好きだ。桜は毎年散るが、来年にはまた花を咲かせてくるからな。
人生もまた、そのように何度も花を咲かせられるものであればいい」
「死んだ亡霊が人生を語るの？」
「亡霊だからこそだ。それに」

「それに？」

霊夢に怪訝な顔でツッコミを入れられるが、不人は真面目な顔で返す。

「死にゆく（散りゆく）からこそ示せるものもある……そうは思えないか？」

そう最後に言い残し、不人は妖夢を伴って幽々子の待つ場所へ歩いていくのだった。

六話：親愛なる庭師

魂魄妖夢には家族と呼べる者が3人程いる。

1人は実際に血のつながりのある祖父の魂魄妖忌。

祖父と孫娘の関係と言えば、大体の場合は目に入れても痛くないという可愛がりようを見せるが、この2人にそれは当てはまらない。妖忌は非常に厳格な性格であったために孫であろうと甘やかすことはせずに妖夢を厳しく育ててきた。

今は妖忌がどこぞへと姿をくらましたために教えを受けることは出来ていないが、彼女の剣の師匠でもあったので、最も強い関係性は祖父と孫の関係よりも師弟関係と言えるかもしれない。

2人目は主(あるじ)である西行寺幽々子だ。

幽々子から与えられた役職は剣術指南役兼庭師というものであるが、もっぱらは庭師である。

というか、剣術指南は今までほとんど出来たことが無い。

これは妖夢が不真面目なわけではなく、幽々子が面倒臭がってやらないせいである。

何度か主に指南しようとしたが、箸より重たいものは持てないと逃げられているのが現状だ。

もっとも、幽々子は生きている存在相手ならばまず負けないので教わる必要が皆無なのだが。

とは言っても、主従関係が悪いわけではなく、2人の仲は良い。幽々子自身が妖忌との堅苦しい主従関係が苦手だったらしく、現在は母と娘、あるいは姉と妹のような緩い関係を形成している。もっとも、妖夢が幽々子に振り回されたり、からかわれるのがコミュニケーションの基本の形となっているのだが。

そして、3人目は同じく主に値する西行寺不人である。

「妖夢殿、庭仕事も一段落ついたのなら茶でもいかがかな」

「……あの、そういったことは従者がやるべきことでは?」

「何を、下の者をねぎらうのも上に立つ者の役割。遠慮することはありませんぞ」

「はぁ…そういうことでしたら」

庭に生える木々の剪定(せんてい)を終え、一息をつく妖夢へとにこやかに声をかける不人。生真面目な妖夢はいつものように従者としてそれはどうなのかと反論するが、すぐに丸め込まれてしまう。

「では、茶をどうぞ。温めにしているのですぐに飲めますぞ」
「お心遣いありがとうございます」
「茶菓子に羊羹もあるので遠慮なくどうぞ」
「わぁ！　…あ、コホン。いただきます」
美味しそうな甘味が出てきたことに目を輝かす妖夢。
しかし、すぐに顔をキリッと引き締め何とか取り繕う。
もっとも、不人は優しげな瞳で見つめているので全く誤魔化せていないが。
「あ、でもこれって幽々子様に言わずに食べていいものなんですか？」
羊羹を1つ摘まんだところで、妖夢が思い出したように問いかける。
幽々子は見かけによらずよく食べる。そのため食への執着心は人一倍強い。
以前、幽々子が取っておいた甘味を誤って食べてしまった時は、酷い目に遭ったと妖夢は遠い目をする。
「フ、もちろん。これは妖夢殿のために用意したものですので」
「ほ…それなら遠慮なくいただきますね」
「まったく、幽々子殿とて黙って食べた程度では大人げないことはしないでしょうに」
「で、でも、以前は化けて出てやるって脅されました」
「妖夢殿、それがし達は既に亡霊ですのでこれ以上化けようがありません」

食べ物の恨みは怖いと言うが、菓子を取られた程度で化ける者はいまい。
「大方、妖夢殿の反応が楽しくてからかったのでしょう。幽々子殿はそういうお人ですから」
「不人様から止めるように言ってはいただけないんですか？」
「残念なことに、それがしは楽しそうにする幽々子殿の姿が好きなのです」
「知ってました」
いつものように惚気始めた不人に白い目を向ける妖夢。
だが、その目は何の効果も生み出すことなく、朗らかに笑われることで終わってしまう。
妖夢はそのことに溜息をつきながらも、羊羹を口に運ぶ。
「美味しい…あ、えっと大変美味です」
「それは良かった。ささ、もっとお食べください」
「はい」
羊羹の美味しさに不満げな表情から、一転して顔をほころばす妖夢。
そんな彼女の姿に不人も頬を緩ませて見つめる。
彼の顔は主が従者に向けるものとは程遠い、娘を見る父親のような表情である。
これが妖夢と不人の関係性だ。

妖忌が厳しく妖夢と接していたのなら、不人は妖夢を甘やかして接している。
妖夢もそれは理解しているので、意識して従者としての立場をしっかりしようとしているが、結局今回のように甘やかされてしまうのだ。
因みにそうした時の妖夢は、不人にとっては精一杯背伸びをしようとしている子どもにしか見えない。故に、さらに可愛がってしまうのも致し方の無いことだ。そう、不人は妖夢にとっては、姪を可愛がる親戚のおじさんのようなものなのだ。
「しかし、いつもながら妖夢殿の庭造りは見ていて飽きないですな」
「いえ、自分など未熟者もいいところ。まだまだ、お師匠様の足元にも及びません」
「そう謙遜なさることはない。確かにまだ妖忌殿の技には到底及ばないでしょう。しかし、妖夢殿には妖夢殿の良さがあるのです。未熟さも時には味となるのです」
「そういうものなのでしょうか…?」
「ええ、妖夢殿も長く生きれば分かるようになりますよ」
笑いながらそう言う不人に妖夢は分からないとばかりに首を捻る。
だが、妖夢に分からないのもある意味で当然と言えば当然だろう。
不人が飽きないと言ったのは、妖夢が日々成長を遂げて行っているからだ。
妖忌の庭造りや剣術は完成されたものだった。妖夢と比べればまさに月とスッポン。
しかしながら、妖夢には成長の余地がある。そこから赤ん坊が初めて立った、歩いたと

いうような感動を得ることが出来るのだ。これは完成された妖忌の庭造りでは味わえないものである。故に、妖夢の庭造りには味があるのだ。

「だと良いんですけど……しかし、お師匠様はどこに行ったんでしょうか」

ふと、といった感じに妖夢が呟く。

「心配ですか？」

「いえ、お師匠様に心配なんてしたら『それはこっちの言葉だ、未熟者』と言われてしまいます」

「フ、確かに。妖忌殿ならそう言うでしょう」

妖忌に一喝された記憶を思い出したのか、ぶるりと身を震わす妖夢。

そんな姿に思わず笑いをこぼしながら不人は茶を口に含む。

「心配はしていません。でも……まだ学びたいことは山ほどあるんです」

「なるほど……」

己の未熟さを恥じるように唇を噛みしめる妖夢。

恐らくは異変の際に霊夢達に負けてしまったことで、自分の力の無さを痛感しているのだろう。

こんな時に妖忌が居れば何と言ったであろうかと不人は考えてみる。

――――甘えるな、自分で学び取れ。

「妖忌殿らしいが……これをそれがしが言うのは…うむ」
「お師匠様がどうかされましたか？」
「いや、独り言だ。気になさるな」
「はぁ…」
　妖忌の名前が出たので飛びついてくる妖夢だったが、不人は苦笑いをしながら誤魔化す。何やら納得できない顔をする妖夢だが、不人はあまり厳しい言葉を妖夢に浴びせることが出来ないのだ。こういう所が彼女を甘やかしてしまう所以（ゆえん）なのだろう。
「しかし、あの妖忌殿が教えるべきことを教えずに出て行くとは思えませんな」
「どういうことでしょうか？」
　なので、不人は厳しく言わずにやんわりと慰めることにする。
「思い出してみても、妖忌殿は幽々子殿が苦手にする程の生真面目さを持っていました」
「はい。あの自由奔放な幽々子様もお師匠様はからかえませんでしたからね」
「ええ。ですから、そのような御人が弟子の育成を放棄するとはとても思えません」
　今でこそ緩くなっているが、妖忌が居た時の主従関係は硬いものであった。
　これは何も幽々子が妖忌を冷遇していたのではなく、妖忌が硬い関係を望んでいたからである。
　それ故に幽々子は妖忌を信頼しながらも、どことなく苦手としていた。

（もっとも、本当に苦手にしていたのはあの目でしょうが）

ただ生真面目過ぎるから苦手にしていたわけではない。時折、ふとした瞬間に妖忌はここではないどこかを、自分ではない誰かを幽々子や不人を通して見るのだ。その目は2人を侮辱しているわけではなく、むしろ妖忌には珍しい優しさを湛えるものである。

恐らくはその理由が何なのか分からなかったので、幽々子は彼を苦手にしていたのだろう。

「それで、お師匠様が私の修行を放棄したのでないのなら、どうして出て行ったのでしょうか？」

「……そうですね。考えられる理由があるとすれば」

妖夢に続きを促されて思考の海に沈んでいたところを引き上げられる。

分からないことを考えても仕方がない。今は分かることの話をしようと不人は口を開く。

「教えられることは全て教えたということでしょう」

不人の言葉に妖夢は納得がいかないと首を捻る。

とてもではないが、自分が師の持つものを全て授かったとは思えないのだ。

「……私は未熟者も良いところですよ」

あくまでも未熟者。それが妖夢の自己評価である。

「まだ空気も斬れませんし、時も斬れません。お師匠様なら軽く斬ってみせるのに」
「そうでしょう。妖忌殿なら一振りで木を細切れにしますし、最悪、剣が無くとも斬ってみせます。さらには死や呪いすら斬り裂くことができるそうですし」
「……先は長いですね」
「ええ、同じ領域に立つには１０００年はかかるでしょう」
途方もなく高い壁を改めて認識し、妖夢がガックリと肩を落とす。
やはり、自分は未熟で非才で同じ場所まで辿り着けるはずがないと。
しかし、そんな妖夢に不人は否定の言葉を投げかける。
「ですが――１０００年前には妖忌殿も斬れなかったのですよ？」
「え…？」
そんなことは信じられないと、妖夢がキョトンとした顔で見つめてくるが不人は首を振る。
「千里の道も１歩から。妖忌殿とて初めは空気すら斬れなかった。
ですが、１歩ずつ前に進んで果てしなく続く剣の道の頂（いただき）に立ったのです。
妖夢殿が未熟者なのは当然のこと。まだ歩き始めたばかりなのですから」
「でも、それと私の育成を放棄したことに何の関係が…」
「分からないのですか？　妖夢殿、あなたは１人で歩いて行けると認められたのですよ」

不人の言葉に目を見開く妖夢。
彼女は今まで一度たりとも妖忌に認められたことなどなかった。
妖忌はいつも厳しく、現状に甘えることを許さずに彼女を叱咤し続けた。
そんな彼が何も言わずに弟子の下を去っていった。これを認めたと言わずに何と言うのか。
「赤子のように手を引いてやらずとも、自分の足で前に進める。そう信じたからこそここを出て行くことが出来たのです。そうでなければ今もここに居たことでしょう」
「そう…なんでしょうか?」
「ええ。教えることはもう何もない、後は自分で学んでいけということです」
「自分で学ぶ……」
「思い出してください。妖忌殿が常日頃から言われていた言葉を」
不人に言われるがままに、妖夢は妖忌が口にしていた言葉を思い出す。
普段は何かを尋ねるだけで一喝してくるような師が唯一教えてくれた教えを。
「――――斬ればわかる」

自分の力に不安を持った時、これからどうすればいいか分からない時。

自らの道標とする言葉。それが斬ればわかる。
「真実は眼では見えない、耳では聞こえない、真実は斬って知るもの……悩んでいても結局の所は斬らなければ何も分からない。だから斬る、斬ればわかる。そういうことだったんですね」
「ええ、妖忌殿は妖夢殿が道に迷った時に、再び前に進むことが出来る言葉をしっかりと残していっていたのです。これさえあれば、後は自分で歩いていけるでしょう?」
そう言って妖夢に優しく微笑みかける不人。
妖夢の方も悩みが晴れたらしく、可愛らしい笑みを浮かべてみせる。
これで、もうしばらくは何も心配する必要はないだろうと不人が安堵の息を吐く。
だが。
「何かわからないことがあれば取りあえず斬ればいいんですね!」
「……ん?」
妖夢の言っていることと、妖忌が言っていたことに微妙な食い違いを感じる。
「悩んで止まるぐらいなら剣を振ればいい。敵か味方か分からなくても斬ればわかる。なんでこんな大切な教えを忘れてたんだろう」
「よ、妖夢殿?」
「不人様、貴重なお話ありがとうございました。それでは、今から剣の修行を始めてきま

す。

お茶とお菓子ありがとうございました！」

困惑する不人を置いて一目散に刀を取りに駆け出していく妖夢。

悩む暇があったら剣を振って修行をする。

その思考自体は悪くないのだが、何故だかダメな方に吹っ切れてしまった気がする。

「……ま、まあ、考え過ぎであろう。うむ」

一抹（いちまつ）の不安を抱きながらも不人は無理に自身を納得させるのだった。

その後、博麗神社を訪れた際に妖夢が〝辻斬り〟扱いされているのを知り、膝をついたのはまた別の話である。

七話：亡霊夫婦

「不人さん、あーん」
「かたじけない、幽々子殿」
幽々子殿が口に運んできた菓子を口にし、咀嚼する。そんなそれがしの姿を見つめながらニコニコと笑う幽々子殿の姿は、いつも以上に魅力的であるが、今日はどうにも落ち着かない。さて、どうしたものかと落ち着かない原因の方へとチラリと目を向ける。
「……藍（らん）、何かしらこの言いようのない敗北感は」
「気にしてはダメです、紫様」
「ねえ、藍。私達もお互いに食べさせ合いましょうか」
「紫様、余計に虚しくなるだけなのでやめましょう」
「そうね……私が間違っていたわ」
それがし達の向かい側で、すすけた背を見せる紫殿とその式神の八雲藍（やくもらん）殿。
１０００年近くの友人なので、彼女達がここ白玉楼にいるのは何もおかしいことではない。
今日も紫殿が幽々子殿を尋ねて遊びに来てだけだ。だというのに、何故か今日は空気

が違う。
　どこら辺が違うかと言われれば、ずばり幽々子殿が人前にも関わらずにやたらと引っ付いて来ることだ。２人きりの時ならいざ知らず、客人の前でこのようなことをするのは珍しい。いや、それがしとしては別に構わないのだが。
「あら、２人ともそんな顔してどうしたの？　私達が変なことでもしているかしら」
「変ね。ええ、凄く変。あなた達夫婦の仲が良いのは良く知っているけど、人前で見せつけるようにイチャつく程じゃなかったはずよ。おじいちゃんとおばあちゃんなんだから少しは自重しなさいよ」
　おばあちゃんという言葉に空気が凍りつく。幽々子殿は相変わらずのニコニコした笑顔であるが、その裏には間違いなく般若が潜んでいるだろう。その証拠に紫殿と一緒に死を浴びせられている藍殿の顔が面白い程に引きつっている。
「愛に年齢は関係ないわ。それに年を言うなら紫の方が上じゃない。１０００歳は越えてるでしょ」
「あなたと大して変わらないわよ。そもそも妖怪に年齢のことを言うなんてナンセンスよ、ナンセンス。ゆかりんは永遠の美少女なんだから」
「だったら、亡霊にも関係ないわね。私も永遠の新妻よ。そもそも死んでいるのだから年齢も何もないわ」

どちらも見とれる程に綺麗な笑顔。だが、醸し出す空気は殺し合いのそれ。
おかしい。今日は友人同士の和やかなお茶会だったはずなのだが……。
一体どういうことなのかと引きつった顔で考える。それはそれがしだけでなく紫殿もだった。
「それにしても今日の幽々子は随分と攻撃的ね。私、何かあなたを怒らせることしたかしら？」
「正解よ、紫。私が何に怒っているか分かる？」
「最近は幽々子に何かした覚えはないんだけど……」
どうやら、紫殿が何か幽々子殿を怒らせる行為をしたのが原因らしいが。
紫殿は思い当たる節が無いらしく首を捻っている。
しかし、改めて目の前のそれがし達夫婦を見たところで、『ああ』と納得の声を上げる。
「もしかして、私が愛しの旦那様を誘惑したことを怒ってるの？」
「大当たりよ。死になさい」
「いくら何でも直球すぎない!?　もっと会話をしましょうよ！」
「じゃあ弁解の機会をあげるわ」
友人相手に向けることは滅多にない絶対零度の視線を向ける幽々子殿に、さしもの紫殿も焦る。

そんな珍しい光景を眺めながら、それがしも幽々子殿が怒る原因となった出来事を思い出す。
「弁解も何も、不人さんに『私のものになってくださらない』って言っただけよ」
「それのどこが〝だけ〟なのかしら」
スキマを開いて、それがしの頬に触ろうとしてきた紫殿の手を幽々子殿が叩き落とす。紫殿は『痛いわぁ』と嘘泣きをしながら、恨めしそうに幽々子殿を見つめてくる。それと誤解の無いように言っておけば、それがしは丁重に紫殿の誘いをお断りしている。
「そもそも何で私の旦那様に手を出そうとしたのかしら」
「だって、あなた達を見ていたら夫婦っていうものが羨ましくなったんだもの」
「だったら、神隠しでも何でもして適当に捕まえて来ればいいじゃない」
「顔も心も良い人ってなかなか見つからないのよ。だったら、すぐ近くに居る該当者を奪った方が早いじゃない」
そう言って悪びれることもなく笑う紫殿。
恐らくは本気ではなく遊びなのだろうが、それでも力が力のために笑えない。
スキマを全力で活用すれば、それがしを捕らえることなど大した手間ではないのだから。
それと同時に、隣のもう1つの力も本気でなくとも大惨事につながりかねない。

「紫……残念だわ。長い付き合いの友人を殺すことになるなんて」
「待って幽々子。あなたに本気を出されると私でも辛いのよ」
「大丈夫よ。痛みも苦しみも感じずに送ってあげるから」
「ああもう、冗談よ、冗談！　だから能力を使うのをやめなさい。藍が本気で怯えてるから」
幽々子殿が全力で死の気配を漂わせたところで、紫殿が冗談だと両手を挙げる。
恐らくはその後ろに居る藍殿が、本気で顔を青ざめさせているのに気づいたからであろう。
藍殿も大妖怪ではあるが、生きている以上は幽々子殿の力相手は少々分が悪いのだ。
「冗談ねぇ…私、笑えない冗談は嫌いって知らなかった？」
「初耳ね。それに冗談だけじゃなくて、あなた達のことを思ってのことでもあるのよ」
「へぇ、なにかしら？」
殺気は引っ込めたものの相変わらず、目は笑っていない笑顔を向ける幽々子殿。それでもなお、笑顔を絶やさず正面から向かい合う紫殿は、流石は幻想郷の賢者と言うべきか。それとも命知らずと言うべきだろうか。
「結婚生活もそろそろマンネリになってきたかと思って、刺激を与えてあげようと思っただけよ」

「余計なお世話ね。私達はラブラブよ、これまでもこれからも。ね、不人さん」
紫殿の返答をバッサリと切り捨てる幽々子殿。
そして、愛を証明するかのようにそれがしの腕に抱き着いてくる。
やはり、それがしの妻は幻想郷一に可愛い。
「あら、随分と自信満々ね」
「逆に自信を持てない理由が無いわ」
「あなたがそうでも旦那様の方はどうかしらね。不人さん、私も幽々子に負けないぐらい美人だと思うのだけど、どうして私のものになってくださらないのかしら？」
科(しな)を作ってこちらに声をかけてくる紫殿に溜息を吐く。
やはり、この御人は人をからかうということを反省しないようだ。
まあ、妖怪である以上そうそう変われないのも仕方がないのだが。
「何度も言わせないでください。それがしは幽々子殿の夫をやめるつもりはありません」
「幽々子を側室にすれば何の問題もないわね。それに、私の下に来るのなら藍もついて来るわよ」
「え？」
何を言っているんだ、この主はという目で藍殿が紫殿を見つめる。

しかし、それでも紫殿は怯まない。それどころか余計に面白そうに笑う。
「ほら、藍もしっかり誘惑しなさいな。九尾の名前が泣くわよ」
「無茶なことを言わないでください、紫様！　ほら、幽々子様の殺気がまた上がってますよ!?」
「紫……黄泉路に向かう準備は出来たかしら？」
「藍、主のピンチよ。命を張って私を守りなさい」
「理不尽すぎます！　うぅ…すまない橙。どうやら私は帰れそうにない」
藍殿の普段の凛々しさも主のいじりの前では形無しである。いや、冗談だとは分かっているのだろうが、幽々子殿の殺気が本気過ぎるのが理由であろう。何はともあれ、幽々子殿にいじられる妖夢殿のようで可哀そうになってきたので助け舟を出す。
「紫殿、それに幽々子殿も冗談が過ぎますぞ。そもそもそれがしには複数の女性を相手にする甲斐性などありません。幽々子殿1人を愛すだけで精一杯です」
「あら、じゃあ複数人を相手に出来る甲斐性があったら私以外の人も愛すの？」
「無論、複数人分の愛を幽々子殿だけに注ぎます」
ほんの少し拗ねたように尋ねてくる幽々子殿の髪を撫でて宥める。
それが功を奏したのか、幽々子殿は機嫌の良い柔らかな笑みを浮かべる。
「つまらないわねぇ。もっと山あり谷ありの夫婦関係の方が見ている方としては楽しい

のに」
「それがし達はこれでいいのですよ。この身が望むことは幽々子殿の隣にあり続けること。ならば、他の誰かの下に行くはずもない」
わざとらしく肩を落としてみせる紫殿に苦笑と共に言葉を返す。
だが、紫殿の方は何を思ったのかいつもの笑みを消して真剣な目を向けてくる。
「……それは仮に生まれ変わっても？」
「例え、幾千、幾億の輪廻を巡ったとしても必ず幽々子殿の隣に立ちます。まあ、それがし達は輪廻の輪から外れているので、説得力はないかもしれませんが」
「いいえ、この上なく説得力があるわ。あなたなら確かに幽々子の隣に立ち続けるでしょうね。……決して変わることなく、ずっと」
そう言って、どこか優し気な笑みを浮かべる紫殿。
彼女の笑みの意味が分からずに幽々子殿にも目で問いかけて見るが、首を振られてしまう。
「ふふふ、やっぱりお似合いよ、あなた達夫婦は」
「当然」
「ええ、当然ね」
お似合いと言う言葉に２人で揃って頷く。

その息の合ったそれがし達の行動に紫殿はクスリと笑い、スキマを開く。
「お似合いのお二人の邪魔にならないように、私達は帰るとしましょうか、藍」
「はい」
「今度は普通にお話をしましょうね、紫」
「ええ、じゃあ失礼するわ」
藍殿は綺麗にお辞儀をし、紫殿は手を振りながらスキマの中に消えていく。
2人を見届けた幽々子殿は、残った湯飲みを御盆へと載せて片付け始める。
そんな姿を見ていると何故だか愛おしい気持ちが止めどなく溢れ出す。
なので、1つ喉を鳴らして幽々子殿の注意を引く。
「ン……幽々子殿」
「なにかしら、不人さん?」
桜のような髪をなびかせこちらに振り返る幽々子殿。
その姿に見惚れながら、それがしは7文字の言葉を紡ぐ。
「――――愛(あい)しています」
突然の言葉に一瞬驚いたような表情を見せる幽々子殿。

だが、それもすぐに終わり嬉しそうに頬を桜色に染めながら返事を返してくれる。

「――――愛(あい)しているわ」

7文字の言葉に、甘い口づけを添えて。

八話：馴れ初め

「幽々子様、不人様、お食事の準備ができましたよー」
白玉楼の幽々子と不人の部屋の前で、妖夢が２人の名前を呼ぶ。
「……幽々子様ー？　不人様ー？」
しかし、２人が出てくることはなく、また返事もない。
もしやここには居ないのかと思うが、人の気配自体はする。
だとすると、何か問題があって２人は出て来られないのやもしれない。
「ご無礼お許しください！」
そう考えた妖夢は主を救わねば思い、勢いよく障子を開く。
そして、部屋の中を一目見た瞬間にパッと顔を赤らめる。
「も、申し訳ございませんでした……」
頬を朱に染めたままモゴモゴと謝罪の言葉を口にする妖夢。
ここまでであれば、２人の情事でも盗み見てしまったのかと思うがそれは違う。
確かに２人は寝てはいるが、いやらしい意味ではない。

純粋に幽々子と不人は寝ているのだ。ただし、不人が幽々子を膝枕した状態で。
「……ん？　これは妖夢殿、どうかされましたか？」
「す、すみません、不人様！　お２人を御呼びしても返事が無いもので何かあったのかと」
「ああ、そういうことですか。いや、申し訳ない。２人して寝込んでいたようです」
妖夢の声が引き金となったのか、先に不人が目を覚まし妖夢に頭を下げる。
それに対して妖夢は大慌てでブンブンと首を振る。ついでに、隣の半霊も左右に揺れている。
そんな微笑ましい姿に不人は軽く笑いながら、膝元の幽々子の顔を覗き込む。
「……どうやら幽々子殿はまだ起きられないようですね」
「はい…そうですね」
不人の言葉につられて、妖夢も幽々子の寝顔を見つめる。
いつもは、何者にも囚われぬようなカリスマに満ちた顔も、今は子どものように柔らかい。
心の底から安心して相手にその身を委ねている証拠だ。
「申し訳ありませんが、幽々子殿が起きられるまで待って頂けませんか？」
「はい。それは構いませんが……」

内心で食事を後で温め直さないとなぁと思いながらも、妖夢は頷く。
そんな微妙な内心に気づいたのか、不人が苦笑しながら話しかける。
「お詫びと言っては何ですが、幽々子殿が起きるまでに何か話をしましょうか」
「話ですか？」
「はい。何か聞きたいことがあればそれを、妖夢殿が日頃の愚痴を言いたいのならそれを」
「ぐ、愚痴なんてとんでもないです！」
「フ、では何か聞きたいことはありますかな？　今ならそれがしの秘密もばらすやもしれません」
カラカラと楽しそうに笑う不人に、この人にばらして困る秘密などあるのだろうかと思う妖夢。しかし、何も聞きたいことがないと言ってしまうと、それはそれで手持ち無沙汰となってしまう。何より、黙っているよりも話していた方が幽々子も起きやすいだろう。そう、考えた妖夢は乙女らしく一度聞いてみたかったことを尋ねてみる。
「では、お2人の馴れ初めを教えて頂けませんか？」
「それがしと幽々子殿の？　さほど面白い話でもありませんよ」
「いえ、是非ともお聞きしたいです」
「そうですか……いいでしょう。でしたら、あの日の話でもしましょうか」

そう言って、不人は幽々子の髪を優しく撫でながら語りだしていくのだった。

「何とか西行妖の封印は出来たわね……」

友人が自害した日の朝。

八雲紫（やくもゆかり）は永久に咲くことを忘れた桜の下に居た。

足下に埋まるのは友人とその夫の亡骸。

「これが最初で最後の墓参りになりそうね」

しかし、彼女にその者達の思い出に浸ることは許されない。

何故なら。

「あら、あなたは誰？」

「……初めまして、私は八雲紫。あなたの友達候補よ、西行寺幽々子さん」

「幽々子……それが私の名前？　ごめんなさいね。どうしてか、自分のことが思い出せないの」

紫の友人である幽々子は、亡霊となって生前のこと全てを忘れたのだから。

もしも、幽々子が生前のことを思い出すというのならば、それは彼女の消滅を意味する。

そうすれば、西行妖の封印も解けてしまう。
それだけはあってはならない。でなければ、生前の彼女が自害してまで人が死に誘われるのを食い止めようとした決意が無駄になる。故に、紫はかつての友人に『初めまして』と心を押し殺して告げるのだった。
「まあ、思い出せなくても問題ないわよね。新しく知っていけば良いんだから」
「そうね……新しく知れば良いのよね」
幽々子は何も思い出せないというのに、飄々とした様子で話す。
紫はその姿に、何者にも囚われずに優雅に空を舞う蝶を思い浮かべる。
それは生前の幽々子がなりたかったものだ。だが、紫は素直に喜ぶことが出来なかった。
記憶を失った人間は、果たして記憶を失う前の人物と同一の存在なのだろうか。
そんな哲学的な問いが紫の頭の中部に浮かぶ。
しかし、如何に優秀な彼女と言えど、その問いに答えを出すことは出来なかった。
否、出す気にもなれなかった。
大切なことは2人の思い出は、永遠に思い出されることがないという事実だけなのだから。
「というわけで、あなたの名前も教えてくれる?」

「…？　あら…あなたも……」
そんな陰鬱な気分に浸っていた紫だったが、幽々子の言葉で意識を戻される。
はて、今この場に自分以外の存在があっただろうかと、疑問に思う紫。
そして、幽々子の視線の先を見て納得する。
「申し訳ございません。それがしにも自分のことがとんと分からぬのです」
「あら、もしかしてあなたも自分のことを覚えてないの？」
「どうやらそのようですな」
視線に居たのは桜の下に埋まるもう1人の人間。
西行寺幽々子の夫として生き、夫として死んだ者。
不人。どっちつかずの存在から人間になった男。
「ただ……記憶が無くとも1つだけ分かることがあります」
「え…？」
「あら？　興味深いわ、教えてくださる？」
不人も亡霊となり全ての記憶を失ったはずだ。だというのに何が分かるというのだろうか。
思わず、淡い希望を抱いて幽々子以上に身を乗り出してしまう紫。
しかし、その期待は予想外の形で裏切られることになる。

「幽々子殿、あなたに一目惚れしました」

思わず、ポカンと口を開けてしまう紫。面白そうに笑う幽々子。
そして、大真面目な表情で幽々子を見つめる不人。
「ふふふ…見た目と違って随分と情熱的なお方ね」
「自分で自分が分かりませぬが、恐らくはそうなのでしょう」
「おかしなことね。自分のことは分からないのに、他人を愛していると言えるなんて」
呆気にとられる紫を放置して話を進めていく幽々子と不人。
「でも、困ったわ。突然のことだから気の利いた返歌の1つも思い浮かばないわ」
「問題はありません。それがしも、あなたの美しさは幾千の歌をもってしても、表すことができぬと思っておりますので」
「あら、お上手ね」
「本心からです」
まるで、話す内容が最初から決まっていたかのようにポンポンと続く会話。
それは、生前の2人を思わせるようで、紫は口をはさむことが出来なかった。
「じゃあ、こうしましょうか。ここに1本の木があるわ」

「はい」
生前には散々苦しめられた西行妖を指差して、ただの木扱いをする幽々子。
不人の方もそれに従ってただ頷くだけ。
紫は何故だか、そんな2人の態度に納得できない何かを感じてしまうのだった。
「これを御柱に見立てましょう」
「なるほど……」
そんな紫を放置して話を進めていく2人。不人は、まるで言葉を交わさなくともすべて分かり合えるとでも言うかのような、簡単な会話だけで自分が為すべきことを理解する。
「では、それがしは左回りに」
「もちろん、私は右回りに」
西行妖の正面に並んで立ったと思いきや、今度はお互いに背を向け合い木の周りを回る2人。
その時点で、紫は2人がなんの真似をしているのかを理解し、呆れたように苦笑する。
なるほど、生まれ変わってもなお添い遂げ続けると誓い合うだけはある。
「ああ、なんと美しい女性(ひと)だ」
「ふふ、あなたも素敵な男性(ひと)よ」

御柱木の周りを回って男女が顔を合わせる。
これは国造りの神であるイザナギとイザナミが行った婚礼の儀式。
２人は何の気まぐれか、この儀式を選んだ。
本来ならば死によって引き裂かれる運命を辿るはずの２柱の神。
その運命を否定するかのように、不人と幽々子は生を終えた先で愛を誓い合う。
生者と死者は決して交わらぬ。されど、同じ死者ならば分かたれることはない。
「幽々子殿、それがしの嫁になってはくださらぬか？」
「出会ってすぐになんてせっかちな人ね。でも、どうしてかしら。悪い気分はしないわ」
「それでは…！」
「ふふふ、出会ってすぐに始まる愛というのも素敵かもしれないわね？」
ふわりと桜（はな）が舞うような笑みを見せて幽々子ははにかむ。
不人はその笑みに魅せられたように、顔を惚けさせる。
そして、幽々子は告げるのだった。記憶を失いながらも、あの日の言葉をなぞるように。
「私のお婿さんになってくださる？」
「喜んで」
どちらが先に結婚を申し込んだのか忘れる程に、不人は深く頭を下げる。

そうして交わされる婚礼の儀式。
死が2人を分かつまで、否、死を越えてなお愛を誓い合う2人。
その光景の美しさに紫は無意識のうちに眩しそうに目を細めるのだった。
「……あら？　そう言えば大切なことを忘れてたわ」
「どうかされましたか、幽々子殿」
ふと、思い出したように声を上げる幽々子の姿に、不人と紫も首を傾げる。
はて、一体何を忘れていたというのだろうか。

「――――あなたの名前を教えてくださる？」

幽々子の言葉に不人はそう言えばという顔をし、紫はいつもの胡散臭さが完全に消えた呆れ果てた表情を見せる。それも当然だろう。だって、一体誰が思うだろうか。名前すら知らない人間と、平然と結婚しても良いと言う人間が居るなどと。
「しかし、先程も言ったようにそれがしは自分の名が分かりませぬ」
「そうだったわね。じゃあ、紫は知ってる？」
「八雲殿、知っているのならば教えてはくださらぬか？」
特に悪びれた様子もなく、尋ねてくる2つの視線に思わず紫は溜息を吐く。

もう何というか、色々と予想外のことが起き過ぎて疲れる。
「呆れた。名前も知らないのに結婚してもいいなんて言ったの？」
「そう言われると、何も言い返せないわね。でも、前言撤回をする気はないわよ」
「別に反対だなんて一言も言ってないわ。まったく……末永くお幸せにするといいわ」
「ふふふ、ありがとう。それで私の旦那様の名前は？」
ほんの少し厭味ったらしい口調になるが幽々子はどこ吹く風だ。
生前の方が色々と可愛げがあったような気がすると紫は、内心で1人愚痴りながら告げる。
これから長い長い付き合いになるであろう亡霊の名を。
「あなたの旦那様の名前は不人……いいえ、結婚するから――――西行寺不人ね」
それが幽々子と不人の亡霊夫婦生活の始まりであった。

「これがそれがしと幽々子殿の馴れ初めです」
「……」
「妖夢殿？」
不人の話を終え、妖夢の方を見ると何故か彼女は何とも言えぬ表情を浮かべて俯いて

いた。
「どうかされましたかな？」
「いえ…その……やっぱりお２人って凄いなと、再認識していました」
最初は年頃の少女らしく、２人が愛を誓い合う話に顔を赤らめていた妖夢。
だが、主が名前すら知らない相手と、結婚を了承したという話を聞いた今では白目である。
「ええ…と。不人様には失礼ですけど、名前も知らない人と結婚するのはマズいんじゃないですか？　お見合いだって名前ぐらいは知れますよ」
「そう言われると、返す言葉がありませんな」
妖夢の指摘に全くその通りだと頭を掻く不人。しかし、その仕草からは形式的な謝罪しか見て取れず、心底反省しているようにはとても見えなかった。そのため、妖夢は日頃の不満も兼ねて幽々子への指摘を行う。
「私から見てもお２人はお似合いだと思いますし、幽々子様も幸せそうです。ですが、それとこれとは別です。幽々子様は本気を出せば何だってこなせるのに、こういう大切なことでもいい加減にすませるから、お世話する私は色々と大変なんですよ？　偶には不人様からもちゃんとするように言ってください」
幽々子は物事の本質はあっという間に見抜くというのに、その対処をしたりはしな

い。
　もちろん、彼女がやらねばならないことには対処するのだが、そうでなければ基本物見遊山だ。
　そのため、先に言っておけば避けられた厄介ごとも妖夢には降りかかる。
　というか、わざと妖夢が苦労するものだけ対処していない。
　恐らくはこれも幽々子なりの愛情表現なのだろう。たぶん、きっと。
「妖夢殿には申し訳ないですが、それがしが幽々子殿を縛ることはありませんよ」
　そんな妖夢の必死の訴えだったが、惚れた弱みを握られている不人には届かない。
「何者にも縛られず優雅に宙を舞う蝶を手元に置きたいという気持ちは分かりますが、羽を折り籠の中に閉じ込めては意味がない。蝶は自由に空に羽ばたいてこそ真の美しさを発揮できるのです」
「……つまりどういうことですか？」
「これからも妖夢殿には迷惑をかけるということです。そうでしょう、幽々子殿？」
「え？」
　何故そこで幽々子の名前が出るのかと、視線を不人の膝で寝ているはずの幽々子に向ける妖夢。
　そして、ニッコリと寒気のするような笑みを浮かべる幽々子と目が合う。

あ、私終わった。それが偽りの無い妖夢の気持であった。
「ゆ、ゆゆ、幽々子様？　い、いつから起きてたんですか？」
「私をいい加減な性格って言った辺りかしら。酷いわぁ、妖夢。私だっていつも一生懸命に頑張ってるのよ」
「そ、そうですよね！　幽々子様はいつだって全力で優しい主様です！」
破滅の未来を回避するべく、全力でおべっかをかく妖夢。
しかしながら、そんな見え見えの魂胆など通じるはずもない。
「そうよね。そんな優しい主様の悪口を言う半人前の従者には罰を与えないと。妖夢、今日から1週間、あなたの好きなおかずを全部私に奉げなさい」
「そ、そんなぁー…」
ガックリと肩を落とす妖夢に、そんな姿を心底面白そうに笑う幽々子。
こうも分かり易い反応をしてくれるのだから、幽々子もさぞからかいがいがあるのだろう。
そんなことを考えて笑いながら、不人は後で自分のおかずを妖夢にあげようと決めるのだった。